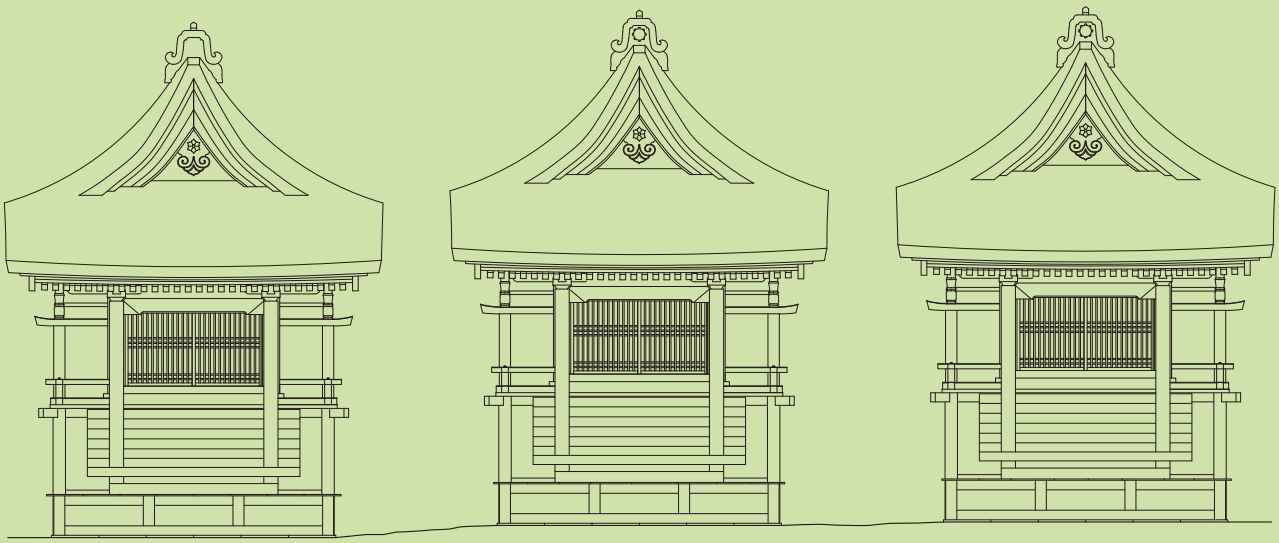
公益財団法人

和歌山県文化財センター年報

埋蔵文化財発掘調査と文化財建造物保存修理の記録

2020



1　且来Ⅵ遺跡　方形周溝墓　弥生土器出土状況 (南東から)

2　吉原遺跡　須恵器埋納遺構 (東から)

巻頭写真２

３　丹生官省符神社本殿

４　護国院三社権現

目　次

令和２年度（2020）　受託業務一覧 …… 2
令和２年度（2020）　受託業務所在地図 …… 3

埋蔵文化財の発掘調査・出土遺物等整理・支援等

且来Ⅵ遺跡の発掘調査 …… 4
吉原遺跡の発掘調査 …… 6
立野遺跡の発掘調査 …… 7
田屋遺跡の第２次出土遺物等整理 …… 8
和歌山城跡の第２次出土遺物等整理 …… 9
新宮城下町遺跡の第４次出土遺物等整理 …… 10
真田屋敷跡の発掘調査等支援 …… 11
根来寺遺跡の発掘調査等支援 …… 11
土井ノ森城跡の発掘調査等支援 …… 12
和田遺跡の第４次発掘調査技術職員等支援 …… 13
岩橋千塚古墳群井辺地区の確認調査等支援 …… 14
御坊市内遺跡の発掘調査等支援 …… 14
日高川町内遺跡の確認調査等支援 …… 15
上城遺跡・上城城跡の発掘調査等支援 …… 15
竜松山城跡の発掘調査等支援 …… 16
浦屋敷跡の発掘調査支援 …… 16
結城城跡の発掘調査支援 …… 17
新宮城下町遺跡の出土遺物等整理支援（２）…… 17
県内遺跡の確認調査等支援 …… 18

文化財建造物の保存修理技術指導

重要文化財　鬪雞神社本殿ほか３棟の保存修理 …… 19
重要文化財　金剛峯寺奥院経蔵の保存修理 …… 20
重要文化財　丹生官省符神社本殿の保存修理 …… 21
国指定史跡　旧名手宿本陣整備事業
　名手役所主屋及び離れ・蔵復旧整備
　その２工事 …… 22
県指定名勝　藤崎弁天弁天堂の保存修理事業 …… 23
県指定文化財　護国院開山堂ほかの保存修理 …… 24
県指定文化財　木ノ本八幡神社本殿の保存修理 …… 24
重要文化財　那智山青岸渡寺本堂の耐震診断 …… 25
国指定史跡　和歌山藩主徳川家墓所（長保寺）
　通用門の保存修理 …… 25
国指定名勝　観海閣復元整備の基本設計 …… 26
「那智の田楽」田楽舞台新調工事
　（重要無形民俗文化財伝統・活用等事業）…… 26
大福院付属棟の修復工事
　～田辺市「景観まちづくり刷新事業」～ …… 27
指定文化財図面作成業務 …… 27

関連研究・資料紹介

美浜町吉原遺跡の土器埋納遺構 …… 28
護国院三社権現基壇の発掘調査 …… 30
和歌山城跡出土の貝杓子と鹿角 …… 32

普及活動

令和２年度（2020）の普及啓発事業 …… 34

センター概要

令和２年度（2020）概要 …… 38

巻 頭 写 真

1　且来Ⅵ遺跡　方形周溝墓　弥生土器出土状況（南東から）
2　吉原遺跡　須恵器埋納遺構（東から）
3　丹生官省符神社本殿
4　護国院三社権現

例 言

1　本書は、公益財団法人和歌山県文化財センターが令和２年度受託業務として行った埋蔵文化財の発掘調査・出土遺物等整理・支援業務、文化財建造物の保存修理技術指導業務・調査・技術支援等、及び普及啓発活動の成果をまとめたものである。

2　掲載した地図は、和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課が発行する「和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図」『和歌山県地理情報システム』http:www2.wagmap.jp/wakayamaken/Portal（和歌山県企画部企画政策局情報政策課）（地図は、国土地理院発行の数値地図）の複製を一部加筆し引用した。

3　掲載写真・図面は、基本的に事業の実施に伴い撮影・作成したものであり、出展が異なる場合は個別に記した。また、本文中の所見は、調査・整理作業中のものであり、今後の作業の進展により変更する可能性がある。

4　原稿執筆は職員が分担して行い、文末に執筆者名を記した。編集・組版は、川崎雅史・大給友樹が担当した。

令和２年度（2020）　公益財団法人和歌山県文化財センター受託業務一覧

埋蔵文化財の発掘調査・出土遺物等整理・支援等業務

	受託業務の名称	所在地	契約期間	調査面積	委託機関等
1	秋月海南線道路改良事業に伴う且来Ⅵ遺跡発掘調査業務	海南市且来	2020.10.06 ～ 2021.03.26	418.1㎡	和歌山県
2	新浜集会場新築工事に伴う吉原遺跡発掘調査等業務	日高郡美浜町吉原	2020.05.28 ～ 2021.03.31	720.6㎡	美浜町
3	町道立野中道線外道路改良工事に伴う立野遺跡発掘調査等業務	西牟婁郡すさみ町周参見	2020.08.18 ～ 2021.03.31	188.3㎡	すさみ町
4	紀伊停車場田井ノ瀬線道路改良事業に伴う田屋遺跡第２次出土遺物等整理業務	和歌山市田屋、小豆島	2020.04.14 ～ 2020.12.28	－	和歌山県
5	和歌山県立医科大学薬学部新築に伴う和歌山城跡第２次出土遺物等整理業務	和歌山市七番丁、九番丁	2020.04.02 ～ 2021.03.19	－	和歌山県
6	新宮城下町遺跡第４次出土遺物等整理業務	新宮市下本町	2020.04.02 ～ 2021.03.31	－	新宮市
7	町道 105 号線改良工事に伴う真田屋敷跡発掘調査等支援業務	伊都郡九度山町九度山	2020.05.30 ～ 2021.03.31	77㎡	九度山町
8	紀の川市内遺跡発掘調査等支援業務（土井ノ森城跡）	紀の川市中鞆淵	2020.07.29 ～ 2020.11.30	1175㎡	紀の川市
9	令和２年度旧県会議事堂整備事業に伴う根来寺遺跡発掘調査支援業務	岩出市根来	2020.04.17 ～ 2020.11.30	－	和歌山県
10	令和２年度岩橋千塚古墳群追加指定事業に係る井辺地区確認調査等支援業務（井辺１号墳）	和歌山市井辺	2020.09.02 ～ 2021.03.26	－	和歌山県
11	六十谷第２浄水場更新用地和田遺跡第４次発掘調査技術職員等支援業務	和歌山市六十谷	2021.01.18 ～ 2021.03.31	226.4㎡	公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団
12	御坊市内遺跡発掘調査等支援業務（堅田遺跡）	御坊市湯川町財部	2021.01.12 ～ 2021.03.31	100㎡	御坊市
13	日高川町内遺跡確認調査等支援業務（土生Ａ遺跡・前田遺跡）	日高郡日高川町丹生、佐井	2020.09.23 ～ 2021.03.31	－	日高川町
14	宅地造成に伴う上城遺跡・上城城跡発掘調査支援業務	日高郡みなべ町東吉田	2020.09.02 ～ 2020.10.30	－	みなべ町
15	竜松山城跡発掘調査等支援業務	西牟婁郡上富田町市ノ瀬	2020.06.01 ～ 2021.03.31	－	上富田町
16	すさみ串本道路建設事業に伴う結城城跡発掘調査支援業務	東牟婁郡串本町有田上	2020.09.15 ～ 2020.11.30	181.0㎡	国土交通省近畿地方整備局
17	すさみ串本道路建設事業に伴う浦屋敷跡発掘調査支援業務	東牟婁郡串本町江田	2020.12.02 ～ 2021.03.31	176.7㎡	国土交通省近畿地方整備局
18	新宮城下町遺跡出土遺物等整理支援業務（２）	新宮市下本町	2020.08.12 ～ 2021.03.31	－	新宮市
19	令和２年度県内遺跡発掘調査等事業に伴う確認調査等支援業務	和歌山県内	2020.05.08 ～ 2021.03.31	－	和歌山県

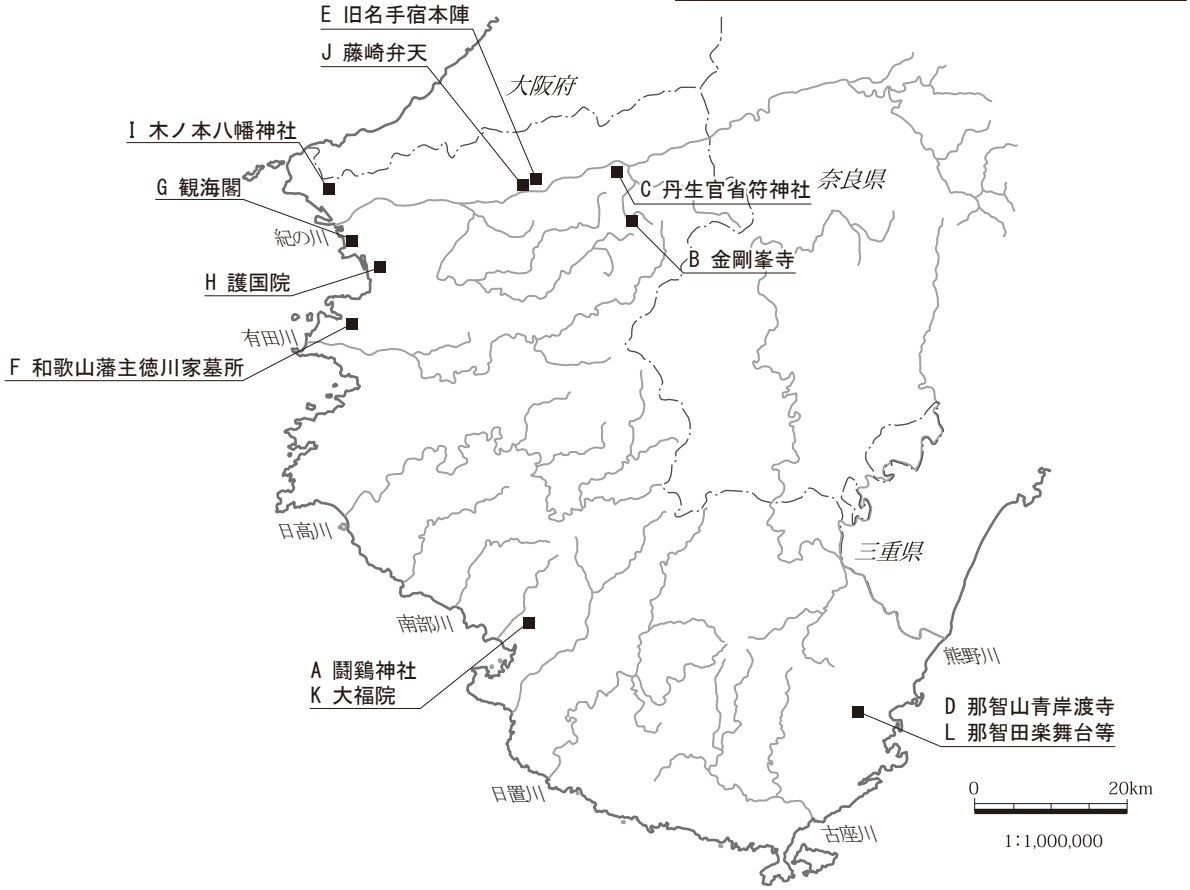
文化財建造物の保存修理技術指導業務等

	受託業務の名称	所在地	実施期間	棟数	委託機関等
A	重要文化財　鬮雞神社本殿ほか３棟保存修理技術指導業務	田辺市東陽	2020.06.08 ～ 2021.03.31	４棟	宗教法人　鬮雞神社
B	重要文化財　金剛峯寺奥院経蔵保存修理技術指導業務	伊都郡高野町高野山	2020.06.09 ～ 2021.03.31	１棟	公益財団法人高野山文化財保存会
C	重要文化財　丹生官省符神社本殿　保存修理技術指導業務	伊都郡九度山町慈尊院	2020.06.03 ～ 2021.03.31	３棟	宗教法人丹生官省符神社
D	重要文化財　那智山青岸渡寺本堂　耐震診断事業にかかる技術支援業務	東牟婁郡那智勝浦町那智山	2020.02.06 ～ 2021.03.31	１棟	宗教法人那智山青岸渡寺
E	史跡　旧名手宿本陣整備事業　名手役所主屋及び離れ・蔵復旧整備その２工事設計管理業務	紀の川市名手市場	2020.04.21 ～ 2021.03.31	２棟	紀の川市
F	史跡　和歌山藩主徳川家墓所　歴史活き活き！史跡等総合活用整備事業（通用門）技術指導業務	海南市下津町	2020.08.19 ～ 2021.03.31	１棟	宗教法人　長保寺
G	名勝　令和２年度名勝和歌の浦観海閣復元基本設計委託業務	和歌山市和歌浦	2020.08.18 ～ 2021.03.31	１棟	和歌山県
H	県指定文化財　護国院開山堂ほか保存修理技術指導業務	和歌山市紀三井寺	2020.04.01 ～ 2021.03.31	５棟	宗教法人　護国院
I	県指定文化財　木ノ本八幡神社本殿　保存修理技術指導業務	和歌山市西庄	2020.11.10 ～ 2021.03.31	１棟	宗教法人　木本八幡宮
J	県指定名勝　藤崎弁天弁天堂修理工事設計監理業務	紀の川市藤崎	2020.04.28 ～ 2021.03.31	１棟	紀の川市
K	景観重要建造物　「大福院」保存修理に係る施工監理業務	田辺市湊	2019.07.17 ～ 2020.05.31	５棟	田辺市景観まちづくり刷新協議会
L	那智の田楽伝承・活用等事業に係る設計監理業務	東牟婁郡那智勝浦町那智山	2020.04.01 ～ 2021.03.31	１棟	那智田楽保存会
M	令和２年度指定文化財図面作成業務	和歌山県内	2020.09.11 ～ 2021.03.31	－	和歌山県

令和２年度(2020)　受託業務所在地図

埋蔵文化財の発掘調査・出土遺物等整理・支援等業務

文化財建造物の保存修理技術指導業務等



且来Ⅵ遺跡の発掘調査

遺跡の時代：弥生時代～中世
所　在　地：海南市且来
調査の原因：秋月海南線道路改良工事
調 査 期 間：2020.11 ～ 2021.03
調査コード：20-02・056

はじめに

当文化財センターでは、和歌山県海草振興局海南工事事務所から委託を受けて、秋月海南線道路改良事業に伴う且来Ⅵ遺跡発掘調査業務を実施した。

且来Ⅵ遺跡は、海南市北部を東西に流れる亀の川が形成した沖積平野である亀川平野の左岸に位置し、弥生時代から奈良時代にかけての集落跡として知られる遺跡である。周辺では、亀川遺跡や岡村遺跡等で縄文時代後期から人々の活動が確認できる。既往の調査としては、平成６・７年度に県道小野田内原線道路改良工事に伴って海南市文化財調査研究会による発掘調査が遺跡南部で実施されており、弥生時代から古代にかけての土坑、柱穴、建物跡が多数検出されているとともに、西側に向かって遺構面が緩やかに下がっていることが判明している。

また、遺跡の北側に隣接する且来Ｖ遺跡は、令和元年度に当文化財センターが同事業に伴って、本発掘調査を実施しており、中世以降の大規模な整地の痕跡や部分的にではあるが古墳時代から古代と中世の遺物が含まれる２面の遺構面が遺存していること、また、旧亀の川の氾濫堆積とみられる砂積層が遺構面下に厚く堆積していることなどを確認している。

且来Ⅵ遺跡の位置図

調査の成果

発掘調査は、且来Ⅵ遺跡中央部から西寄りの地点の418.1㎡について調査を行った。調査区は周辺環境に配慮した作業工程と排土置き場の確保等から南北方向１～５区に分け、１区に関しては更に１－１区、１－２区、１－３区に細分して調査区を設定している。また、一部の地区については作業を並行しながら実施した。

且来Ⅵ遺跡の調査区割図

調査地の基本層序は、現代の造成土（第０層）下に、近世以降の水田耕作土（第１・２層）、中世以降の耕作土（第３層）、弥生時代から古代の遺構面（第４層）、自然堆積層である基盤層（第５層）という５層大別できる土層が確認でき、第４層は古墳時代から古代の遺物を含む遺構が掘り込まれる第４-１層と、弥生時代中期から後期の遺物を含む遺構が掘り込まれる第４-２層に分層できる。

１・２区

調査区の南半部であり、遺構の遺存状況が最も良好であった調査区である。ほぼ全面で前述の２面の遺構面を確認できた。検出した主な遺構は、土坑、柱穴・小穴、溝、落ち込み等である。特筆すべき遺構として、２区北部で確認した方形周溝墓がある。

この方形周溝墓は２区北部で北東から南西方向に延びる溝として当初検出した。溝底部より弥生時代中期の壺が出土したことから方形周溝墓に伴う溝と断定した。溝に堆積した土層は上層と下層に大きく分けるこ

とができ、上層からは弥生土器の破片が確認できたものの、下層からはほとんど遺物が出土していない。供献された土器が溝に落ちこんだ後、一気に溝の下層部分が埋没した状況と考えられる。

方形周溝墓溝の土層堆積状況

方形周溝墓溝から出土した弥生土器
（写真左下に穿孔が確認できる）

この方形周溝墓の溝から出土した土器の下部には、穿孔が確認でき、本来の壺としての機能をわざと失わせた供献土器（方形周溝墓に供えられた土器）であるとみられる。

3～5区

今回の調査区の北部（3～5区）では、南部（1・2区）と基本的層序は一致するものの、異なった土層の堆積状況を確認している。調査区北端に位置する5区では、河川の氾濫堆積とみられる土層により第4層上部や第5層が大きく削平されており、明瞭に遺構面を2面確認することができなかった。また、検出した遺構はいずれも掘削深度が浅く、残存状況が悪い。5区南側に隣接する4区では、2面の遺構面を検出したが、程度の差はあるものの5区と似た傾向が見られた。また、調査地の中央に位置する3区については、他の調査区と異なり、標高の高い部分の第5層である地山を削平し、1－2区に隣接する3区南側の低地部を削平した地山の土で埋めてかさ上げしている整地の状況が見て取れた。これらの整地時期については、現状では不明な点が多いが、整地層と見られる土層から出土した遺物から、中世から近世と考えられ、令和元年度に調査した且来Ⅴ遺跡の調査区2南側と類似する状況と確認できる。

3区東壁土層断面（北から南へ整地している）

まとめ

今回の発掘調査により、且来Ⅵ遺跡の旧地形や土地利用について明らかになった。1・2区では、既往調査成果とほぼ一致する弥生時代と古代の遺構面を検出しており、今後検出した柱穴の配置等から古代の集落域が西側へ更に広がると考えられる。一方で調査区北部（3～5区）において、亀の川の旧流路の氾濫堆積とみられる土層を確認したこと、遺構の遺存状況がよくないことなどから集落域は北には広がらない可能性が高い。一方で集落域と氾濫堆積との境と想定できる場所で方形周溝墓を検出したことにより、周辺の亀川遺跡や岡村遺跡を含めたこの地域の弥生時代の集落と墓域について今後改めて検討の必要がある。

また、且来Ⅴ・Ⅵ遺跡周辺は水田開発に伴うほぼ正方位の条里型地割が施工されているが、これまで開発時期は定かではなかった。発掘調査の成果から、この水田開発の時期については中世以降の可能性が高まっている。

（濵﨑　範子）

吉原遺跡の発掘調査

遺跡の時代：弥生時代～江戸時代
所　在　地：日高郡美浜町吉原
調査の原因：新浜集会場新築工事
調 査 期 間：2020.07 ～ 2019.09
調査コード：20-25・010

はじめに

吉原遺跡は、紀伊半島西部の太平洋をのぞむ海岸砂丘上に所在する。

今回の調査は、昭和 62 年度調査地の南接地で発掘調査を実施後、出土遺物整理作業を行い、本年度中に発掘調査報告書を刊行した。

過去の発掘調査によって、弥生時代中期から古墳時代、平安時代、中世から近世の墓域が展開していることが知られている。昭和 62・63 年度の県道柏・御坊線改良工事に伴う発掘調査では、弥生時代中期から庄内式併行期（弥生時代終末期から古墳時代初頭）の方形周溝墓や土壙墓が、本遺跡東側で実施した平成 28 年度調査では中世から近世の火葬墓が確認された。

発掘調査の概要

今回の調査では、集会場予定地 1,550㎡における樹木の除根に伴う立会調査と、集会場建物部分（２区）と擁壁部分（1 － 1・1 － 2 区）の約 720㎡における発掘調査を実施した。

吉原遺跡　位置図

土壙墓の可能性のある土器埋納遺構２基、土坑、小穴、溝など、弥生時代と古墳時代の遺構を確認した。

弥生土器埋納遺構は、中央底部で弥生土器の鉢が横倒しの状態で出土した。骨片などは確認できなかったが、弥生時代中期頃の土壙墓の可能性が高い。その他、弥生土器広口壺の口縁部や櫛描き波状文を施した壺体部、甕などの弥生時代中期の土器片が出土した溝、壺の体部片が出土した土坑も確認できた。

須恵器埋納遺構では、遺構上部から横倒しになった須恵器瓹と、中ほどで逆さになった須恵器高坏が出土した。古墳時代中期の祭祀遺構あるいは土壙墓の可能性がある。

今回の発掘調査では、土壙墓の可能性が高い弥生時代中期ごろと古墳時代中期の土器埋納遺構などを確認したことにより、当該地区が弥生時代や古墳時代の墓域と埋葬に関連する祭祀場として利用された可能性がある。東西約 500 mに及ぶ古い段階の砂堆の稜線から後背地にかけて営まれた、各時期の墓域の広がりと土地利用を考える上で、立地の貴重な調査成果を得ることができた。

出土遺物整理作業の概要

発掘調査の終了後、出土遺物の整理作業を行った。

出土遺物は、弥生土器、須恵器、土師器、瓦質土器、瓦、陶磁器、石製品等であった。出土遺物の洗浄、注記、土器接合・補強の作業を経て、出土遺物の実測・写真撮影作業を行った。遺構・土層断面図と出土遺物の実測図面のトレ - ス作業、組版作業、報告書原稿の執筆作業を行い、発掘調査報告書を刊行した。

（田之上　裕子）

吉原遺跡遠景（北東上空から）

立野遺跡の発掘調査

遺跡の時代：弥生時代～中世
所　在　地：西牟婁郡すさみ町周参見
調査の原因：町道立野中道線外道路改良工事
調 査 期 間：2020.09 ～ 2020.10
整 理 期 間：2020.11 ～ 2021.01
調査コード：20-41・002

はじめに

当文化財センターでは、すさみ町から委託を受けて町道立野中道線外道路改良工事に伴う立野遺跡発掘調査等業務を実施した。

立野遺跡は、周参見川下流域に位置する弥生時代から中世にかけての散布地として知られる遺跡である。これまでに発掘調査（第１～６次調査）が行われており、特に第１次調査で検出した弥生時代前期の自然流路からは、突帯文土器、弥生土器、石器の他、木器・木製品が多量に出土し、出土遺物の一部はその重要性を評価され、「立野遺跡出土品」として平成 29 年３月に県指定文化財となっている。

調査の成果

今回の発掘調査は、遺跡南部に位置する 188.3㎡で実施し、北側調査区を調査区１、南側調査区を調査区２として実施した。

調査区１では南北方向に流れる自然流路を確認した。

立野遺跡の位置図

１区　調査区南壁断面（北東から）

調査区南壁土層断面で確認できた自然流路肩部により、この流路は最大幅約 8.4 m、最大深度約 0.7 mと確認できた。この流路の堆積層は、上層、中層、下層に区分できる。この土層堆積状況は既往調査の流路と合致することから、この流路は弥生時代前期中段階まで遡る可能性が考えられる。

調査区２は立野遺跡の南端部に位置する調査区である。河川の氾濫堆積と見られる礫や砂を主体とした土層が確認できた。出土遺物が乏しく断定できないが、遺跡南端部は 17 世紀ごろまで周参見川の旧流路であったと考えられる。下層では砂礫層が約 1.0 ～ 1.7 m以上堆積していることを確認しており、河川氾濫堆積層もしくは自然流路そのものの堆積層と推定する。流路上部に堆積したシルト層は、上部が暗色化していることから、部分的に陸化していたとみられ、ごく一部に人間の活動痕跡が残る。自然流路が埋没した時期については「慶安の山津浪」（1652）による可能性が高く、今回確認した氾濫堆積は平野部東側に想定された旧周参見川もしくはその支流によるものと推定できる。

整理作業の概要

発掘調査終了後に出土した遺物及び現地調査記録等の整理作業を実施した。

出土遺物（コンテナ１箱）は、土師器、瓦器、陶磁器、石器である。出土遺物は洗浄、注記、登録、接合、実測、写真撮影を行った。遺物実測図と遺構図はトレース、版組を行い、調査報告書の原稿を作成し、調査報告書を刊行した。

（濵﨑　範子）

田屋遺跡の第２次出土遺物等整理

遺跡の時代：弥生時代～中世
所　在　地：和歌山市田屋・小豆島
調査の原因：県道紀伊停車場田井ノ瀬線道路改良事業
調 査 期 間：2020.04 ～ 2020.12
調査コード：15-01・093、16-01・093、
18-01・093、18-01・093-2

はじめに

当文化財センターが和歌山県から受託して実施した県道紀伊停車場田井ノ瀬線道路改良事業に伴う田屋遺跡の発掘調査において出土した遺物および現地調査記録等の整理を行い、発掘調査報告書を刊行した。

整理の内容

田屋遺跡の出土遺物等整理業務としては、令和元年に紀伊停車場田井ノ瀬線道路改良事業に伴う田屋遺跡第１次出土遺物等整理業務（以下、第１次整理）を行っている。本業務は第１次整理に引き続き行ったものであり、主な業務の内容は遺物の接合・補強作業、遺物の復元作業、遺物の実測図作成作業、図面トレース、組版、写真撮影、原稿執筆、編集・校正等である。また、これらの作業ののち、遺物移管に向けた遺物の再収納作業・管理台帳の作成を行った。

遺物の接合・補強作業は、第１次整理で行ったものを除く 38 箱を対象とした。接合・補強作業を終え、実測作業対象として抽出した遺物のうち、写真撮影や今後の展示に際し全体の形を分かるようにする必要のある遺物 48 点に対しては、型と充填剤を用いた復元作業を行った。

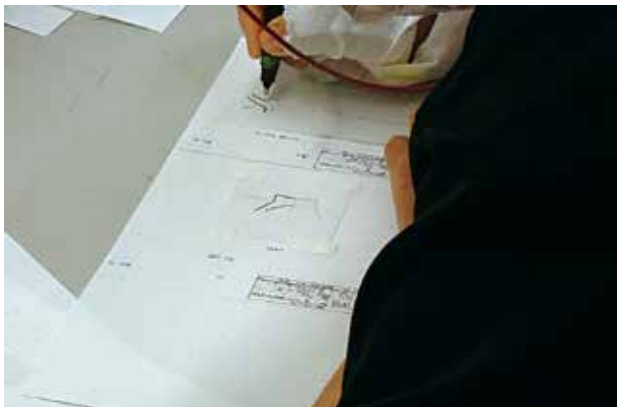
遺物の復元作業

遺物の実測作業は、第１次整理で作業を行ったものを除く 235 点を対象に行った。作成した遺物実測図は、第１次整理で作成したものを含め、製図ペンを用いて原則 1/2 の縮尺でトレースを行った。

トレースを行った図面は、遺構図面・遺物図面とも組版を行った。遺構図面はデジタルで組版を行い、遺物実測図はトレース図とレイアウト用紙を用いて組版を行った。また、報告書に掲載する遺物を対象に写真撮影を行った。写真図版については遺物写真・遺構写真ともデジタル組版を行った。

整理作業の成果

整理の対象とした発掘調査の調査区は南北に長かったが、調査区の北半部は奈良時代、南半部は古墳時代の遺構が広がることを出土遺物からも確認した。かねてより長期間で集落が遺跡内を移動していることは知られていたが、今回の整理作業および対象となった発掘調査は、こうした集落の移り変わりを捉える一助となったといえる。　（森田　真由香）


遺物実測図のトレース作業

遺物の拓本作業

和歌山城跡の第２次出土遺物等整理

遺跡の時代：弥生時代～江戸時代
所　在　地：和歌山市七番丁、九番丁
調査の原因：和歌山県立医科大学薬学部新築
整 理 期 間：2020.04 ～ 2021.03
調査コード：17-01・375

はじめに

和歌山城跡は和歌山市の中心地に位置し、独立丘陵の岡山（虎伏山）を中心に築かれた平山城である。調査地は、内堀を挟んで天守や二の丸の北側に位置する三の丸の一画で、付近には紀州徳川家の付家老をはじめ重臣の屋敷地が集中している。発掘調査は平成29・30 年度に、面積約 4,200㎡を対象に実施した。

調査で出土した遺物には、土器類や瓦類等が遺物収納コンテナ（容量 28ℓ）に 487 箱と水漬けした木製品が約 500 点ある。これに和歌山県教育委員会が2020 年度に調査した第２次調査の遺物収納コンテナ８箱の遺物を追加して、調査時に作成・撮影した遺構図面・遺構図版とともに整理作業を行った。

整理作業の概要

業務は平成 31（令和元）・令和２年度の２か年で実施するもので、本年度は第２次となる。

業務は第２次調査の遺物洗浄・注記・登録作業をし、補強作業を第１次整理業務の未実施分とともに主要な遺物を対象として行い、それに引き続き復元作業を実施した。報告書に掲載予定の土器類や瓦類・石製品・骨角製品については実測図を作成し、必要に応じて拓本作業を行った。その後、現地調査で作成した遺構図面を抽出し、実測が終わった遺物とともにトレース作業を実施して、図面の組版を行った。実測図を作成したすべての遺物は写真撮影し、そのなかで、報告書に掲載する遺物写真と調査で撮影した遺構写真の抽出したものについて、写真図版の作成を行った。また、遺物観察表を作成し、一連の作業を踏まえ原稿執筆と編集作業をおこない報告書を刊行した。

このほか、木製品 114 点・金属製品 28 点について腐朽の進行を止め、保管・活用を容易な状態にするために保存処理を実施している。

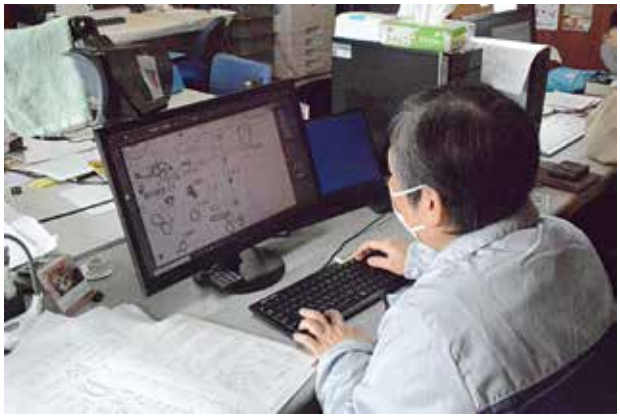
整理作業の成果

遺構図や遺物の検討から、調査区付近の土地活用の変遷を明確にすることができた。調査区付近に人々が住み始めるのは弥生時代中期頃で、間断期はあるものの江戸時代の直前までは、集落や耕作地となっており、江戸時代の直前に厚く堆積した砂の上に、三の丸が築かれていることが明らかになった。

調査区は南北二つの敷地に分かれるが、三の丸の屋敷地が嵩上げされ、居住者が替わっても基本的に区画に大きな変動はない。また、主屋などの建物や井戸・廃棄土坑などは、ほぼ同じ位置に存在する。北敷地については、ほぼ海野家の屋敷地と考えていたが、東端に安藤家との屋敷境が見つかっており、西側で海野家と評定所の屋敷境が確認されたことから、評定所の位置は本来推定されていた位置より東に寄る可能性がある。また、屋敷境の構造は、古い時期には掘立柱構造の柵で、その後、17 世紀末から 18 世紀初頭頃に土塀に代わることも明らかになっている。

（川崎　雅史）

瓦の拓本作業


遺構図の組版作業

新宮城下町遺跡の第４次出土遺物等整理

遺跡の時代：縄文時代～江戸時代
所　在　地：新宮市下本町
調査の原因：新宮市文化複合施設建設
整 理 期 間：2020.04 ～ 2021.03.
調査コード：17-43・043

はじめに

本業務は、新宮市文化複合施設建設に伴う発掘調査のうち記録保存対象となった第２次発掘調査及び第１次発掘調査の西側部を対象としたものである。出土遺物としては、土器類・瓦類・石製品・金属製品などがあり、その分量は遺物収納コンテナ（容量 28ℓ）にして 212 箱である。すでに昨年度実施した第３次整理業務で洗浄・注記・接合などの基礎的な作業は大半終わっており、今年度は遺物・遺構のトレース作業や遺物の写真撮影などを主に行い、それらを基に組版作業を経て、本文の執筆などを行い、報告書の刊行を目途するものである。

遺物実測・トレース作業等

遺物の実測作業については、土器類を主として金属製品や石製品など 650 点ほどの実測を行った。基礎的な作業を終了後、大型土坑や地下式倉庫などの主要遺構から出土した遺物を中心に接合作業を試みた。この際、個々の遺構内だけではなく隣接する遺構や直上の包含層から出土した遺物も含めて実施している。その後これらの遺物の内報告書掲載予定の遺物については、遺物充填材による補強・復元作業を施した。さらにこれらの遺物については、実測並びにトレース作業を行った。

遺物写真撮影・図版作成

報告書掲載予定遺物及び今後活用されると思われる遺物については、写真撮影を実施した。またこれらをもとに報告書の遺物写真図版の作成を行った。

そのほか遺物実測図についても包含層や遺構毎に図版の作成を行った。

本文執筆等

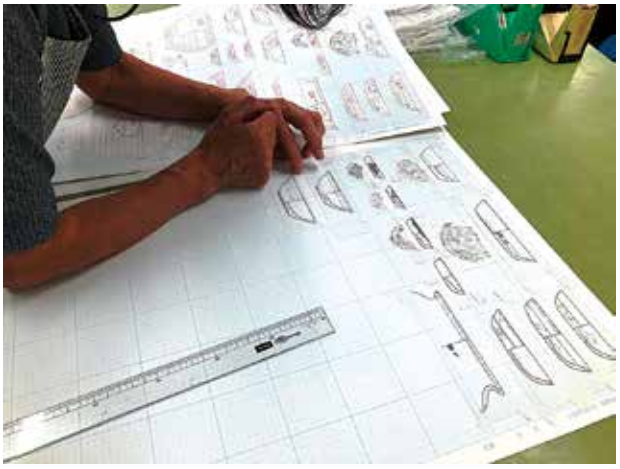
作成した図及び図版をもとに組版・編集作業を行うとともに、これと併行して本文の執筆を行った。その後、印刷業者の入札・選定を行い、入稿・校正等の作業を経て、予定通り業務期間内に報告書の刊行に至った。また、整理の終わった遺物については、再収納、コンテナ台帳の作成を行い、新宮市に搬送して移管作業を完了した。

まとめ

刊行された報告書においては、基礎的な事実報告をもとに、当該遺跡の時期的変遷や主要遺構の特性及び出土遺物の傾向、さらには近隣の遺跡との比較についても論及した。

その上で、新宮城下町遺跡の眼目、その重要性はひとえに中世の湊であったとことと結論づけている。

こうした遺跡を発掘調査で確認しえたこと、さらには２年近くに及ぶ整理業務を経て、その内容について明かにできたことは、大きな成果であったと言えよう。　（村田　弘）



遺物図版作成作業

遺物写真図版レイアウト情況

真田屋敷跡の発掘調査等支援

遺跡の時代：鎌倉時代～江戸時代
所　在　地：伊都郡九度山町九度山
調査の原因：町道 105 号線改良工事
支 援 期 間：2020.06 ～ 2021.03
調査コード：20-15・009

はじめに

和歌山県教育委員会及び九度山町教育委員会が実施する町道 105 号線改良工事に伴う真田屋敷跡の発掘調査等を円滑に行うため支援業務を受託した。支援業務の内容は、機械掘削、人力掘削、実測作業、写真撮影、出土遺物等整理作業等の支援を行い、調査報告書の編集及び刊行を行った。

調査の成果

真田屋敷跡は、紀伊山地から派生する丘陵地形の北側が紀の川に浸食された段丘崖に、南側が紀の川の支流丹生川により浸食された丘陵状の台地に位置する。

真田屋敷跡の南側に位置する県指定史跡真田屋敷跡は、関ヶ原の戦いの後に真田昌幸・信繁（幸村）父子が蟄居したといわれる場所で、現在、1741 年（寛保元年）創建（1857 年（安政 4 年）再建）とされる真言宗の善名称院が建っている。別名、「真田庵」の名で親しまれている。

町道 105 号線改良工事に伴う第 1 次発掘調査及び第 2 次発掘調査では、鎌倉時代から江戸時代以降の遺構の展開が確認された。真田氏や真田信繁（幸村）父子の屋敷跡に関する時期の遺構は確認されていないが、江戸時代における九度山町市街地周辺の土地整備を伺うことができる。　（土井　孝之）

遺構掘削状況（北北東から）　九度山町教育委員会提供

根来寺遺跡の発掘調査等支援

遺跡の名称：根来寺遺跡
所　在　地：岩出市根来
調査の原因：旧県会議事堂整備事業
支 援 期 間：2020.04 ～ 2020.11

はじめに

和歌山県教育委員会が実施する令和 2 年度旧県会議事堂整備事業に伴う根来寺遺跡発掘調査支援業務を実施した。

業務の概要

支援業務の対象は、重要文化財旧和歌山県会議事堂の移築事業地内西側で検出され、令和元年度に再発掘調査した階段遺構の移設作業、解説パネル及びピクトサインの製作を県教育委員会の指導のもと実施した。移設作業、解説パネル及びピクトサインの製作は再委託して実施した。

階段遺構の移設作業は、昨年度製作した階段遺構型取成形（GRC）を根来寺遺跡展示施設に設置した。ビゼンソイルを吹き付けて施工した土台に、製作時に分割されたパーツを高さ調整しながら設置し、各パーツの接合部分の目地埋め、全体の補彩、展示状況下での色彩調整を行った後、キャプションを設置して設置作業を完了した。

解説パネル及びピクトサインの製作は、階段遺構型取成形（GRC）の製作工程を解説したプラメタル製パネルを製作し、ねごろ歴史館に設置した。また、プラスチックなどに印刷されたピクトサイン等を製作し、根来寺遺跡展示施設に設置した。　（山本　光俊）

移設作業完了　和歌山県教育委員会提供

土井ノ森城跡の発掘調査等支援

遺跡の時代：鎌倉時代～明治時代
所　在　地：紀の川市中鞆渕
調査の原因：紀の川市鞆渕地区公共施設建設工事
調 査 期 間：2020.08 ～ 2020.11
調査コード：20-07・035

はじめに

紀の川市が実施する鞆渕地区公共施設建設工事に伴う土井ノ森城跡の発掘調査を円滑に行うため支援業務を受託して実施した。支援業務の内容は、紀の川市担当職員の指導のもと、発掘調査等の支援を行った。

調査では各々、機械掘削、人力掘削、実測作業、写真撮影等の支援及び調査日誌の作成を行った。以上の業務に当文化財センターの技術職員２名が累計 61 日間及び調査補助員１名が累計 45 日間従事した。

また、支援業務の成果品として、調査の所見をまとめた完了報告書を提出した。

調査の成果

紀の川市鞆渕は、貴志川の支流真国川の中流に位置し、北は飯盛山・竜門山を主峰とする竜門山地に、南は生石ヶ峰を主峰とする長峰山脈に挟まれている。当地域は、平安時代後期に石清水八幡宮領としての荘園の成立を見、その後の鎌倉時代には高野山領となっている。

今回調査を行った土井ノ森城跡は、紀の川市中鞆渕に位置し、真国川流域の河岸段丘上に立地する。上流東側左岸の台地上に位置する「ドイバラ」館跡とは、指呼の位置にある。

調査を行った遺構面は、２面である。

第１遺構面は、堆積土の層序及び検出遺構・出土遺物から、凡そ江戸時代後期から近代にかけてのものと考えられる。石組み水利施設は、文献史料と現状の用水路の水系から、現在に続く「湯ノ本溝」より分岐した水路と考えられ、前身の石組み水利施設からの造替えが行われたものである。また、これらは石組み水利施設より古い段階の溝やこれと軸線を同じくする耕作痕、土坑が形成されるまでの間機能していたことになる。

第２遺構面は、掘立柱建物跡を始め、谷状地形で検出した石積み堤防・溝状遺構・土坑等がある。

遺構の消長としては、出土遺物から平安時代後期から鎌倉時代の中で考えることができる。なかでも、第２遺構面の掘立柱建物跡は、地鎮遺構の土師器皿、柱穴に廃棄された土師器皿・瓦器椀等から鎌倉時代の中で消長を押さえることが可能である。

石積み堤防は、検出当初、北側から石積み堤防より南側の耕作地への土砂流入を防ぐための「砂防堰堤」と考えた。しかし、石積み堤防の南側で検出できたのは耕作地ではなく湿地状地地形であったことから、石積み堤防の南側には谷状地形の窪地に自然発生的に形成された小規模な「溜池」が存在したものと考えられる。要は、その「溜池」（＝湿地状地形）の水源を護ると同時に北側からの土砂の流入を「砂防堰堤」として防ぐことが目的であったと考えられる。

今回の調査により得られた検出遺構・出土遺物で重要な事は、調査地の消長が鞆淵荘の荘園の盛衰に符合すると考えられることにある。　　（土井　孝之）

掘立柱建物跡（西側上空から）　紀の川市教育委員会提供

石積み堤防（北西から）　紀の川市教育委員会提供

和田遺跡の第４次発掘調査技術職員等支援

遺跡の時代：弥生時代～鎌倉時代
所　在　地：和歌山市六十谷
調査の原因：六十谷第２浄水場更新用地浄水施設建設
支 援 期 間：2021.01 ～ 2021.03
調査コード：2020-06（WD-4）

はじめに

和歌山市が実施する六十谷第２浄水場更新用地内における浄水施設の新規建設工事に伴う和田遺跡の発掘調査を円滑に行うため支援業務を受託して実施した。支援業務の内容は、公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団の指導のもと、発掘調査等の支援を行った。

調査では各々、機械掘削、人力掘削、実測作業、写真撮影等の支援及び調査日誌の作成を行った。以上の業務に当文化財センターの技術職員１名が累計 41 日間及び調査補助員１名が累計 28 日間従事した。

なお、当該業務は令和３年度も別途契約して実施される予定になっている。

調査の成果

六十谷地区の和田遺跡 は、紀の川下流域右岸の紀の川堤防に隣接する遺跡である。この遺跡は、東西 170 m、南北 140 mの範囲で、弥生土器や土師器が採集されていたことから弥生時代から古墳時代にかけての散布地として周知されていた。第３次発掘調査では、平安時代後期から鎌倉時代の遺構・遺物が検出されている。

周辺の遺跡では、東側の JR 阪和線を挟んで同規模の川口遺跡が所在する。さらに、北側の段丘部には弥生時代の集落遺跡である六十谷遺跡をはじめ、数多くの遺跡が帯状に分布する。

今回の調査は、排土置き場等の確保のため４分割（1－１区・1－２区・1－３区・２区）して調査を行っている。今年度は、２区と１－３区の順で調査が完了した。

２区では、小穴・土坑等 43 基を検出した。遺構面（基本土層第４層）は、標高 3.30 m前後となる。遺構に伴う遺物は少ないが、古墳時代終末期及び平安時代後期から鎌倉時代の須恵器・土師器、瓦器等が出土した。

１－３区では、小穴約 700 基・土坑 10 数基・溝５条、井戸状遺構５基（総数 717 基）を検出した。遺構面は、標高 3.50 m前後となる。１－３区も遺構に伴う遺物は少ないが、弥生時代終末期の土器が大多数を占める。

基本土層第３ｂ層から鎌倉時代 13 世紀中頃の土師器小皿及び瓦器椀がまとまった状態で出土した。基本土層第３ｂ層には、第３次発掘調査においても鎌倉時代の遺物を包含することが確認されているが、自然流路の埋積土との層序関係から江戸時代の堆積土と考えられている。今回の出土状況から包含というより基本土層第３ｂ層面を遺構面とする何らかの遺構に伴う可能性が高いと考えられるため、位置を違えた包含層の時期比定に再考を要するものと考えられる。

調査は、令和３年度にも継続されることから遺構及び包含層の展開について第３次発掘調査地点を含めた広い範囲で検討していく必要がある。　（土井　孝之）

和田遺跡の位置

１－３区　調査遺構全景（北から）
公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団提供

岩瀬千塚古墳群井辺地区の確認調査等支援

遺跡の名称：岩橋千塚古墳群井辺地区
所　在　地：和歌山市井辺
調査の原因：令和２年度岩橋千塚古墳群追加指定事業
支 援 期 間：2020.09 ～ 2021.03
調査コード：20-01・185-505

はじめに

令和２年度岩橋千塚古墳群追加指定事業に伴い、和歌山県教育委員会が実施する井辺地区の確認調査を支援する業務を行った。業務は和歌山県教育委員会職員の指導のもと、当文化財センターが必要な人員を雇用し、業務を支援した。

支援業務では、発掘作業員を約 305 人、調査補助員を 43 人雇用し、技術職員がのべ 45 日間従事した。現場支援の 45 日間では、人力掘削作業等の監理・指揮、写真・図面の記録作業を行った。

調査の成果

井辺１号墳は、７世紀前半に築造された、県内最大の方墳である。過去に関西大学により石室の調査がおこなわれており、調査当時の地形から、古墳は台形をなすと考えられていた。今回の確認調査では、古墳の規模と正確な形状を明らかにするため、墳丘の四隅および南北方向の中心軸にトレンチを設定した。

発掘調査により、墳丘の平面形は東西の辺が膨らんだ丸みのある台形であることが明らかになった。また、原地形を削って周溝を形成し、併せて墳丘の盛土を行ったことが判明したほか、墳丘の南側・東側で段築を確認した。

（森田　真由香）

墳丘の北西隅部（北から）　和歌山県教育委員会提供

御坊市内遺跡の発掘調査等支援

遺跡の名称：堅田遺跡
所　在　地：御坊市湯川町財部
調査の原因：店舗建設
支 援 期 間：2021.01

はじめに

御坊市教育委員会が実施する御坊市内遺跡発掘調査等支援業務を実施した。支援業務は堅田遺跡を対象とし、試掘確認調査の支援を行った。対象地は堅田遺跡の北東端にあたる位置である。

業務の概要

御坊市教育委員会が実施する試掘確認調査のうち、機械及び人力掘削、遺構検出、写真撮影、図面作成等の作業を行った。業務に当たっては、御坊市教育委員会の指導を受けて実施した。

調査の成果

対象地内に２ｍ×５ｍの規模のトレンチを 10 箇所設定し、遺跡の分布範囲と性格等について調査した。

調査の結果、近くを流れる西川の旧河道かその支流と考えられる自然流路を確認した。調査地の大半は自然流路と考えられる。自然流路の肩部からは、弥生土器片と敲石とみられる石器等がまとまって出土した。また、幅約 20cm の溝を１条確認したが、遺物等は出土しておらず時期は不明である。

（山本　光俊）

４トレンチ　溝検出状況（西から）　御坊市教育委員会提供

日高川町内遺跡の確認調査等支援

遺跡の名称：土生Ａ遺跡、前田遺跡
所　在　地：日高郡日高川町土生、佐井
調査の原因：各種開発
支 援 期 間：2020.09 ～ 2021.03

支援業務の概要

日高郡日高川町内に所在する土生Ａ遺跡及び前田遺跡における開発事業に伴い、日高川町教育委員会及び和歌山県教育委員会が実施する試掘確認調査、立会調査等を支援する業務をおこなった。

業務の内容

支援業務では作業員の雇用、現地作業支援及び作業管理、実績報告書作成等の業務をおこなった。また、調査補助員を雇用して実測図作成、写真撮影補助及び図面・写真整理作業等にあたった。

当業務では９月に土生Ａ遺跡、11 月に前田遺跡、２月には再び土生Ａ遺跡で現場作業をおこなった。出土遺物は少量であったため、調査の最終日に遺物洗浄作業を併せておこない、１箱に収納した。

土生Ａ遺跡は、平地から丘陵地に差し掛かる緩斜面地となっており、建物擁壁建設に伴い掘削される範囲について、遺構検出及び図化作業を行った。調査では土師器、須恵器、瓦器片等が少量出土した。

前田遺跡は日高川をやや遡った山間部の河岸段丘上に展開している縄文時代の遺物散布地であるが、今回の調査では遺構・遺物は確認されなかった。（丹野　拓）

土生Ａ遺跡出土遺物

上城遺跡・上城城跡の発掘調査等支援

遺跡の名称：上城遺跡、上城城跡
所　在　地：日高郡みなべ町東吉田
調査の原因：宅地開発
支 援 期 間：2020.09 ～ 2020.10

はじめに

みなべ町教育委員会が実施する上城遺跡、上城城跡発掘調査支援業務を実施した。業務に当たっては、みなべ町教育委員会職員の指導のもと実施した。

業務の概要

みなべ町教育委員会の依頼により調査を担当した和歌山県教育委員会の調査業務の支援として、人力掘削業務の指揮の一部を分担し、竪穴建物等の遺構検出、写真撮影等にあたった。また、調査補助員を雇用し、実測図作成、写真撮影補助及び図面・写真整理作業等にあたった。

調査の成果

調査区全体は近現代の大規模な削平を受けていたが、北側を中心に古墳時代と中世の遺構面が残存していた。

古墳時代の遺構としては調査区北側で竪穴建物が南北に並んだ状態で２棟検出した。北側の竪穴建物は、3.6 m× 3.7 mの方形であり、東壁でカマドの痕跡を確認した。南側の竪穴建物は、南北約６m×東西約３m以上（攪乱により削平を受けているため不明）の方形である。

中世の遺構としては調査区北側で２間×２間の総柱建物跡が検出され、南側で１間×１間の掘立柱建物を検出した。南側の建物は、南側又は東側の調査区外に広がる可能性が考えられる。　（山本　光俊）

北側竪穴建物検出状況（南から）　みなべ町教育委員会提供

竜松山城跡の発掘調査等支援

遺跡の名称：竜松山城跡
所　在　地：西牟婁郡上富田町市ノ瀬
調査の原因：遺跡内容確認
支 援 期 間：2020.06 ～ 2021.03

はじめに

上富田町教育委員会が和歌山県教育委員会の協力を得て実施した竜松山城跡の出土遺物等整理作業の一部の作業工程を受託し、支援業務を実施した。

業務の概要

業務内容は、出土遺物の復元、遺物実測、出土遺物実測図のトレース、遺物写真及び金属製品 X 線写真デジタル処理、遺物収納、金属製品の保存処理及び分析の作業工程の支援である。金属製品の保存処理及び分析は専門業者に再委託した。

復元作業は、実測対象遺物のうち備前焼等 10 点について、和歌山県教育委員会の指導のもと行った。

報告書掲載が必要な金属製品 112 点について実測を行った。銭貨については、拓本をとった。

トレース作業は、実測を行った遺物を対象に実施した。遺物実測図を等倍又は 1/2 に縮小し、ロットリングペンで行った。

写真デジタル処理作業は、報告書掲載の遺物写真撮影データの RAW 現像及び、色補正等を行った。報告書掲載の金属製品 X 線写真については、色補正等を行った。

遺物収納作業は、出土遺物を実測番号及び登録番号順に整理して遺物コンテナに再収納した。遺物コンテナには遺跡名等を記載したシールを各々のコンテナに貼付した。

金属製品の保存処理及び分析は、保存処理の必要な金属製品 109 点について、再委託して保存処理を行った。また、鉛製鉄砲玉 2 点については、鉛同位体比分析を行い、鉛の産地同定を行った。　（山本　光俊）

浦屋敷跡の発掘調査支援

遺跡の名称：浦屋敷跡
所　在　地：東牟婁郡串本町江田
調査の原因：すさみ串本道路建設事業
支 援 期 間：2020.12 ～ 2021.03
調査コード：20-26・25

はじめに

近畿地方整備局紀南河川国道事務所からの委託を受け、和歌山県教育委員会が行う発掘調査の支援を行った。支援業務では、和歌山県教育委員会の指導の下、当文化財センターが必要な人員を雇用し、機会掘削・実測等を行って、業務を支援した。本業務には、調査補助員 5 名、発掘作業員 56 名、整理補助員 1 名、整理作業員 5 名を雇用し、技術職員が述べ 7 日間従事した。

調査の成果

浦屋敷跡は、江戸時代に江田地域の大庄屋であった浦氏の屋敷跡である。この調査では、石垣上に位置する 176.62㎡を調査対象とした。

調査の結果、遺構面を 2 面確認した。第 1 遺構面は主に江戸時代の遺構面であり、調査区南部で礎石とみられる遺構を検出した。第 2 遺構面は、主に弥生時代後期の遺構面であり、弥生土器片を複数含む土坑などを検出した。　（森田　真由香）

遺構検出状況

結城城跡の発掘調査支援

遺跡の名称：結城城跡
所　在　地：東牟婁郡串本町有田上
調査の原因：すさみ串本道路建設（橋脚設置）
支 援 期 間：2020.09 ～ 2020.11

業務の経緯

結城城跡は串本町有田上に所在する中世山城の跡である。国土交通省のすさみ串本道路建設事業に伴い、城の南側をかすめるように道路橋脚が建設されることとなった。

和歌山県教育委員会による試掘確認調査が行われ、遺跡の展開が確認されたため、当センターでは令和元年度に城の西側山麓において発掘調査を行い、中世の井戸等を確認した。

今回の調査地は城の南東側にあたり、住宅の撤去等が終わった場所について調査を行うこととなった。

調査の内容

今回の調査対象地は道路橋脚設置部で約 148㎡と狭小であったため、和歌山県教育委員会が調査主体となり、当文化財センターで機械掘削と人力掘削、図化測量等の作業を支援した。

調査は里道を挟んで北側の旧宅地部分を先に掘削し、引き続き南側の一段低い旧耕作地、里道部分を調査した。調査では石列や小穴等の遺構を検出し、中世から近世にかけての土師器・陶磁器等の遺物が多数出土した。調査後には、遺物の洗浄、遺物登録台帳作成をおこなった。　（丹野　拓）

結城城跡北調査区全景（東から）　和歌山県教育委員会提供

新宮城下町遺跡の出土遺物等整理支援（2）

遺跡の時代：縄文時代～江戸時代
所　在　地：新宮市下本町
調査の原因：新宮市文化複合施設建設
支 援 期 間：2020.08 ～ 2021.03
調査コード：15-43・043 16-43・043

はじめに

当該業務は、新宮市文化複合施設建設に先立って調査されたうち現状保存されることとなった範囲（第 1 次調査の東側大半と平成 28 年度に実施された確認調査）について、新宮市が総合的な調査報告書を作成するための支援業務として実施されたものである。

出土遺物の整理作業

対象となる出土遺物は土器類・瓦類・石製品・金属製品などで、遺物収納コンテナ（容量 28ℓ）にして 165 箱である。これらについて今年度は主として土器類の復元作業や実測作業、実測図のトレース作業を行った。また遺構図については、全体図や土層図のほか個別遺構などのデジタルトレース作業を実施し、これらの実測図を元に遺物図版や遺構図版を作成した。さらに報告書に掲載予定の遺物について、写真撮影を実施した。またこれらの作業と平行して、本文の執筆作業を行った。

なお当該業務については、次年度も継続して作業を実施し、令和 3 年度に刊行が予定されている他分野の成果も取り入れた総合的な報告書の中に所収される予定である。　（村田　弘）

遺構デジタルトレース作業

県内遺跡の確認調査等支援

遺跡の名称：和歌山県内各地の遺跡
所　在　地：和歌山県内各地
調査の原因：各種開発等
支 援 期 間：2020.05 ～ 2021.03

支援業務の概要

和歌山県内に所在する埋蔵文化財包蔵地における開発事業に伴い、和歌山県教育委員会が実施する試掘確認調査及び出土遺物等整理作業を支援した。

業務は和歌山県教育委員会の指導のもと、当文化財センターの技術職員が必要な人員を雇用して実施した。作業内容は、試掘確認調査現場における人力掘削等、整理事務所における出土遺物の洗浄・実測・トレース、遺構図のトレース等である。

試掘確認調査の人力掘削作業

試掘確認調査の支援業務として、発掘作業員を雇用し、調査区の壁面清掃、遺物包含層の掘削、遺構面の精査及び遺構掘削などの作業にあたった。

対象遺跡は、和歌山市寺内古墳群、九度山町慈尊院地区、有田市新堂遺跡、日高町小浦Ⅰ遺跡・小浦Ⅱ遺跡、印南町古屋遺跡、御坊市加尾古墳群などである。

慈尊院地区では紀の川南岸の川沿いで複数回の試掘確認調査に従事し、石組みの堤防関連施設の検出等の作業にあたった。また、新堂遺跡や小浦Ⅰ遺跡・小浦Ⅱ遺跡では、土坑等の検出作業にあたった。

遺物実測・遺構トレース等作業

令和元年度の県教育委員会年報を作成するための基礎資料作成作業として、令和２年 12 月までに、紀の川市小田野井遺跡、海南市且来Ⅴ遺跡、美浜町和田Ⅱ遺跡、みなべ町上城遺跡・上城城跡、田辺市綾代遺跡・坂本の墓地、串本町浦屋敷跡等で実施された確認調査の遺構図についてトレース作業をおこなった。また、これらの遺跡で出土した遺物について、実測及びトレース作業を行った。

出土遺物の水洗・登録作業

整理作業員を雇用して、令和２年度に出土した和歌山市和歌山城跡、有田市新堂遺跡、紀の川市粟島遺跡、岩出市中黒Ⅰ遺跡、日高町小浦Ⅰ・Ⅱ遺跡等で出土した土器・陶磁器等について、ハケ・筆等を使用して水洗した。

また、現場で遺物を取り上げた際のラベル記載事項をもとに遺物登録台帳を作成した。　　（丹野　拓）

検出遺構の実測作業（慈尊院地区石組み堤防）

遺構トレース作業（和歌山城跡）

出土遺物水洗作業（且来Ⅵ遺跡）

重要文化財　鬪雞神社本殿ほか３棟の保存修理

建 築 年 代：江戸前期～中期
所　在　地：田辺市東陽
事業の種類：本殿（本社）・上殿（若殿）　半解体修理
　　西殿（西御前）・八百萬殿（満山社）　部分修理
事 業 期 間：2020.06 ～ 2022.09

神社の沿革と建物の概要

田辺市にある鬪雞神社は、熊野古道「紀伊路」が「中辺路」と「大辺路」に分かれてすぐの「大辺路」沿いに位置する。中世・近世を通じての熊野参詣、西国三十三ヵ所巡礼の中継拠点であった。熊野坐神社（現・本宮大社）より熊野三所権現を勧請したことから「新熊野権現社」と称されて来るが、当社本殿（證誠殿）の祭神は家津御子大神でなく伊邪那美命であって、熊野との関わり方に特徴がうかがえる。また、源平合戦の折には鶏合神事により源氏方へ味方した、という故事から「鶏合権現社」「鶏合宮」「鬪雞宮」とも呼ばれた。現在の社名は神仏分離後の呼称である。

社殿は仮庵山の南麓に北面して、東西一列に６棟が並び建ち、本宮大社の近世期以前の社殿構成を継承している。境内は天正年間に豊臣氏の紀州攻めの戦禍で荒廃した後、徐々に再建・整備された。現在の本殿は紀州藩付家老・安藤家の寄進によって、寛文元（1661）年に完成したことが棟札で判る。西隣の上殿は万治元（1658）年、氏子衆によって本殿より一足早くに再建される。残る４社殿は依然仮殿であった様で、現存する棟札から、本殿東隣の西殿は元文２（1737）年に、上殿西側の中殿（中四社）・下殿（下四社）・八百萬殿は延享５（1748）年に再建されて、現在の社殿が整う（写真１）。平成 29 年２月に重要文化財の指定を受けた。

写真１　修理前の社殿６棟の全景（北西から見通す）

社殿群は近世期からシロアリの被害に見舞われていた。本殿と上殿は、屋根檜皮の葺き替え時期を迎え、過去の修理では修正し切れなかった変形や傾斜、部材の劣化も各所に目立っていた。そこで、今回修理では軒以上の全てと軸部・床組の破損箇所を解体修理し、より健全な状態にまで回復させた上で屋根を葺き替えることになった。本殿・上殿に比べて檜皮屋根の葺替え周期が長めでもあった４社殿では、近年特に蟻害が進行したことを受けて、平成 11 年に軒・小屋組の改修に合わせて屋根が銅板葺きに変更されている。そのうち、西殿と八百萬殿において、縁廻りに生じた木部破損箇所の修繕を行う。以上の保存修理工事を令和２年度から４年度にかけて行う事業でセンターは、工事の技術指導業務を担当した。

事業の概要と保存修理工事の経過

工事はまず、本殿の前面に接続する幣殿の部分解体から着手し、本殿・上殿を包み込む素屋根の建設後に、箱棟、檜皮屋根、屋根野地、小屋組、軒と順番に解体し、各部の破損の程度や仕様、修理の履歴などを確認・整理していった（写真２）。

また、江戸前期再建の本殿と上殿では、木部の塗装・彩色の痕跡が確認できる。今回修理での解体に伴い、建物が内包している情報の一部が失われてしまうこともあり、解体前および解体中にはその範囲や配色など内容や来歴も合わせて調査・記録した。

今年度は以上の解体・調査を中心とした施工を進めた。次年度からは、解体した部材の補修と組み戻し、それに続いて屋根檜皮の葺き直しや木部塗装の塗り替え作業を行い、令和４年夏の竣工をめざしていく予定である。　（下津　健太朗）

写真２　軒までの解体を行った本殿と上殿（手前）

重要文化財　金剛峯寺奥院経蔵の保存修理

建 築 年 代：慶長４年（1599）
所　在　地：伊都郡高野町高野山
事業の種類：屋根葺替、塗装修理
事 業 期 間：2020.06 ～ 2022.03

桃山時代の華麗な彩色が残る経蔵の内部、輪蔵

高野山の奥院に築かれた大名たちの墓所の奥に、弘法大師空海の御廟が佇む。その南東の結界脇に、奥院経蔵は位置する。木食応其上人の勧めで石田三成が建立した三間四方、檜皮葺き宝形屋根の建物で、内部には八角形の回転式輪蔵が組みこまれている。

輪蔵には高麗版一切経 6285 帖（重要文化財）が納められ、手で押すことにより輪蔵に納められた経典が回転することで、読経することと同じ効力が得られものとされた装置となっており、チベット仏教のマニ車の文化と共通する。輪蔵には、厨子などと同様に組物で支えられた軒や、腰組も備えられ、桃山時代の華麗な彩色が施されている。また、経蔵本体の内部壁面にも仏画が描かれており、桃山期の建築彩色の中でも状態の良い稀少な遺構として評価されている。

前回屋根の葺替工事が実施されてから 20 年足らずではあったが、落下した樹木の枝により屋根が破損し、その応急修理時に屋根全面で腐朽が進んでいることが確認されたため、国庫補助事業として令和３年度までの２ヶ年で修復を行う計画となった。また内部に獣害による塗装や部材の破損も認められたため、あわせて彩色剥落止めや木部修理を施工することとなった。

腐朽が進んだ経蔵の小屋組

屋根葺替工事のために素屋根を建設し、傾斜した銅鋳物製の露盤を分解し、檜皮の一部を解体して小屋内部の状況を確認したところ、野隅木や母屋桁などの小屋材の多くに腐朽が及んでいる状況が確認された。また、内部彩色のうち、経蔵内壁に描かれた仏画部分を中心に、層状の剥離が進んでいることも確認され、屋根や小屋組補修工事の振動で剥落する恐れがあったため、工程を見直し、先行して剥落止めを実施し、塗装面を安定させた上で屋根工事、木工事を進める方針とする計画の変更を行った。

本年度には、施工者の作業場で檜皮材の拵えを進めるとともに、桃山期の彩色の保全を第一義とし、試験的に剥落止めの施工を行った。これは、高野山の湿潤で寒冷な気候が、施工にどの程度影響を及ぼすかを慎重に見極めるとともに、昭和 53 年時の修理において合成樹脂なども応用した剥落止めが施工されており、今回の施工手法との相性を見極め、周到な施工方法を事前に検討するためである。その試験結果は令和３年度初頭に確認する計画で、使用する膠の硬化に必要な気温が確保できる７月から本格的な剥落止めに着手する予定である。　（多井　忠嗣）

剥落止めの施工状況

重要文化財　丹生官省符神社本殿の保存修理

建 築 年 代：第一殿・第二殿　永正 14 年（1517）
　　第三殿　　天文 10 年（1541）
所　在　地：伊都郡九度山町
事業の種類：屋根葺替、部分修理
事 業 期 間：2020.06 ～ 2021.03

事業の概要

丹生官省符神社は空海が高野山を開創するために、この地に政所を置いたことにより勧請されたと伝えられる。15 世紀中頃から紀ノ川の氾濫を危惧して社地の移転が行われ、現在の社殿については、同じ形式である第一殿、第二殿は墨書から永正 14 年（1517）、第三殿は棟札から天文 10 年（1541）に建てられたことが確認されている。

本殿は昭和 40 年 5 月 29 日に重要文化財に指定された。前回の屋根葺替から 20 年が経過し、千木等の破損も進んできた為、文化庁や和歌山県、九度山町による補助事業として、主に箱棟廻りの木部と檜皮葺の屋根、塗装の修理を行った。

保存修理の内容

今回、屋根の檜皮葺きを解体したところ、檜皮の腐朽は軽微なものの、檜皮全体に経年による劣化が進んでおり、竹釘が緩んだ状況であることが確認された。

平葺きに用いられている檜皮材の仕様を確認したところ、平葺きは２尺５寸を４枚に対し、１尺５寸を２枚用いる仕様としていた。今回も屋根の反り、品軒等の納まりを考慮し、この仕様に準じて施工を行った。

また、屋根下地の隙間から小屋組を覗くと、昭和51 年の解体修理に保管された部材を認めることが出来た。どれも近世以前に遡ると考えられる部材である。

写真２　屋根工事完了状況（東からみる）

塗装については、各殿で現状の丹塗り面を掻き落としたところ、現状の鉛丹とは異なる濃い色目の赤色顔料や、青色系の顔料等、前回修理以前の塗装痕跡が確認出来た。今回は部分塗り替えの方針であり、復原的な修理は行わなかったが、小屋裏に保管されていた古材にも同様の塗装を認めることができ、少なくとも本殿には弁柄塗の時期があったことが推定された。

屋根の檜皮葺き上げ、箱棟木部修理とともに、彩色部分の剥落止めと補筆修理、施工範囲の塗装と飾り金具の補修取り付けが完了し、素屋根を撤去した後、雨落ち外周の玉石を一旦撤去した上で、地盤面の堆積土を鋤き取って、勾配を整え、基礎部分の排水を改善したうえで玉石を復旧した。

背面雨落ち部の排水溝についても崩土を除去し、モルタルの破損部分を補修した。

今回の修理に際して、現状以前の痕跡を目の当たりにして建物のもつ歴史を再確認した。見学会にも多くの地域の住民が参加してくださったことで、守り伝えられていく文化財の存在を大きく感じた。

（大給　友樹）

写真１　小屋組内に保管されていた部材

写真３　旧塗装の痕跡

国指定史跡　旧名手宿本陣整備事業
名手役所主屋及び離れ・蔵復旧整備
その２工事

建 築 年 代：江戸時代
所　在　地：紀の川市名手市場
事業の種類：復旧整備
事 業 期 間：2020.06 ～ 2021.03

離れ内部の畳復旧状況

平成 29 年度から進めている名手役所の整備事業において、令和元年度実施のその１工事から引き続き、離れ・蔵の工事を実施し、完了した。

令和元年度には木部の組立、屋根下地までの施工、屋根取り合い部以外の左官壁の施工までが完了しており、本年度は瓦材の補修と補足新調、屋根葺き、左官壁の仕上げのほか、建具工事、畳工事などを実施した。

瓦材は、分解後保管されていた古材を可能な限り再用することを主眼としたが、離れ・蔵においては桟瓦が用いられており、面毎に一定の形状に揃える必要があることから、十分に古材を整理分類した上で補足材の寸法や谷の深さなどを確定した。また、公開施設として十分な耐震性能を確保するために葺き土を用いない空葺きを原則としたため、原寸で十分に瓦割りを検討した上で、瓦据え付け用の桟木取り付けを行うとともに、軒先などの要所に銅板を仕込むなどして漏水対策を施した。平成９年度に解体工事が行われた際の記録写真などでは、屋根全体の破損が進み、棟積や屋根端部の納まりなどの詳細が不明な点も散見されたが、近隣の金岡家住宅（江戸時代）などの類例を参考に、紀の川筋の近世民家の特徴的な納まりを保全した。

離れには畳を復旧したが、部屋の中心部近くに炉が切られており、通常の畳割りを行うと、畳がコの字型に切り取られる納まりとなった。炉縁との取り合いでは畳の隅部分が切り取られることが一般的であるため類例を調査したところ、和歌山市禰宜の重要文化財旧中筋家住宅主屋（江戸末期）の木地の間にコの字型の畳が確認されたため、類例に倣った。離れには床の間も配され、戸や窓が開かれた面のみ軒の化粧野地が小舞ではなく板張りとなっているなど、一定の格式を意図したものと推定されるが、どのように使用されていたかは不明である。旧中筋家の木地の間は、藩主の休憩所としても用いられた大広間を有する主屋の中で、当主の私的な座敷として用いられていた部屋であり、名手役所の離れが、藩主の本陣であった旧妹背家住宅と隣接する建物であることも含め、興味深い。

伝統工法で土間を叩き締め、修理、新調した建具を建て込み、屋根工事の施工後に取り合い部の左官壁を仕上げた。

次年度からは主屋の工事に着手するが、離れ・蔵においても一連で電気設備や自動火災報知設備の整備を行う予定である。　（多井　忠嗣）

離れ・蔵竣工（北西隅から見る）

離れ・蔵竣工（南東隅から見る）

県指定名勝　藤崎弁天弁天堂の保存修理

建 築 年 代：江戸時代
所　在　地：紀の川市藤崎
事業の種類：半解体修理
事 業 期 間：2020.04 ～ 2021.03

令和元年度に根本的な修理に向けた基本設計を行った藤崎弁天において、令和 3 年度までの 2 ヶ年の事業として修理工事に着手し、本年度は建物の分解、木部材の補修と取替材の新調を進めるとともに、身舎柱礎石の据え直し、木部軸組、横羽目板壁、組物、丸桁の組立を行った。

瓦屋根が崩壊した重篤な状況であったが、蟻害で原形を留めていなかった小屋組の仕様調査や、柱間装置などの痕跡調査を行いながら、慎重に分解工事を進めた。調査の結果、向拝部分は増築されたものであることが確認出来たが、小屋組や軸部、壁板などの主要な木部は、基本設計時の調査で発見した祈祷札に記された元禄 14 年（1701）ごろと推定される建立当初の状況を残していることが確認された。

また、並行して事業主である紀の川市が行った史料調査により、地元住民から貴重な古写真が提供された。これにより、比較的近年に桟瓦葺に改変されるまでは本瓦葺であったことが判明した。現地に保管されていた波模様の鬼瓦古材とあわせ、棟積に輪違いの装飾を施す仕様は、近隣の粉河寺の境内に類例を認めることが出来、建立時期とも矛盾しないことも確認出来た。

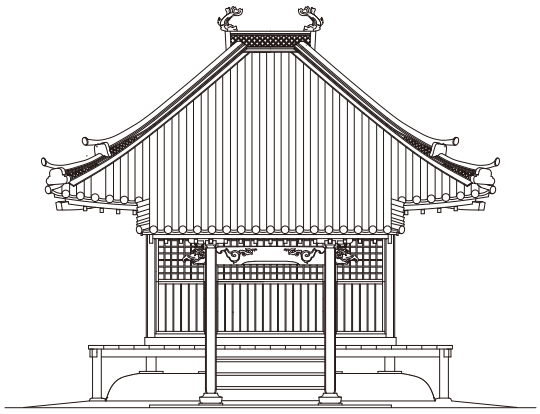
地元住民から提供された古写真（昭和 38 年）

組立の状況

部材に残る痕跡などから建物の変遷を詳細に検討したところ、修理前に桟唐戸が配されていた正面各柱間には当初蔀戸入れられていたことが判明し、垂木にも対応する吊り金具の取り付け痕跡が確認された。一方で後補である部材にも和釘が用いられているものが散見され、向拝の増設や縦板壁、西側面の片引き戸などは古岳幽眞が整備を行った万延元年（1860）年の仕事と判断した。今回の修理においては、万延期の状況に復する方針としたため、向拝は存置するとともに、蔀戸などの建具を復元的に整備することとした。

修理前には建物全体が紅く塗装されていたが、縦板壁下の当初横羽目板には塗装がかけられていない状況から、近年の改変によるものであることが判明し、白木に戻す方針とした。分解した部材は塗装を落とした上で、繕いを行った結果、柱や丸桁には地檜と呼ばれる良質の木材が用いられていることもあり、概ね当初の部材を再用して軸部等の組立を行うことができた。

床板に幅 60㎝近い楠材が用いられていたことや、天井板が、杉の柾目部分を矧ぎ合わせ木目を斜めに配する特徴的な納まりであったことなども確認出来、復元に向けて補足木材の調達も進めた。　（多井　忠嗣）



復元正面図

県指定文化財　護国院開山堂ほかの保存修理

建 築 年 代：江戸時代
所　在　地：和歌山市紀三井寺
事業の種類：半解体修理、部分修理
事 業 期 間：2019.05 ～ 2021.01

県指定文化財である三社権現 3 棟、開山堂、大師堂の保存修理を実施し、すべての工事を完了した。

三社権現においては、令和元年度に引き続き半解体修理を進め、本年度は現地での木部の組み立て、旧規に復する形で塗装を行った。また、復元新調した正面格子戸は、県内の類例に倣って詳細を決定した。

開山堂は、向拝の屋根廻りを中心とした部分修理を実施した。瓦屋根自体には目立った破損は認められなかったが、向拝部分の裏甲や化粧野地板に漏水による腐朽が認められたため、逆漏りが発生していたと判断し、当該部分の瓦葺屋根を一旦分解したうえで木部の補修を行い、葺き直しを行った。また、破損が進んでいた正面蔀戸や縁廻りを補修した。

大師堂は、南側面の本瓦葺屋根の破損部分の葺き直しとともに、北側面の舞良戸を補修した。

護国院では、紀三井寺参詣曼荼羅（市指定文化財・16 世紀）に描かれる多宝塔、楼門（室町時代）、鐘楼（桃山時代）が重要文化財に指定されているが、江戸期建立である今回の修理対象と同様の建物も認めることができ、戦国時代の動乱で荒廃した境内が、江戸時代に計画的に復興された景観の整備とも捉え得る事業となった。　（多井　忠嗣）

半解体修理が完了し、塗装や建具が復旧された三社権現

県指定文化財　木ノ本八幡神社本殿の保存修理

建 築 年 代：元和 5 年（1619）
所　在　地：和歌山市西庄
事業の種類：屋根葺替・部分修理
事 業 期 間：2020.11 ～ 2021.12

建物について

木本八幡宮は和歌山市の北西部に位置し和泉山脈のほぼ西端部にある厳橿山の中腹に所在する。元和 4 ～ 5 年（1618-1619）にかけて本殿を再建したのが現在の本殿であり、三間社流造の檜皮葺建物で技法も江戸初期の特徴を精緻な彫刻が良く示している。その後正保 2 年（1645）、寛文 9 年（1669）、寛政 4 年（1792）、文政 4 年（1821）、弘化 3 年（1846）、明治 19 年（1886）、明治 39 年（1906）、昭和 26 年（1951）と屋根檜皮の葺替を行っているが、当初の部材をよく残しており、建立後大規模な改変は実施されていないものと見られる。昭和 49 年に和歌山県指定文化財として指定を受けた。指定後の修理は、平成 9 年度に屋根葺替工事を行い、平成 23 年度に建物の傾斜の補正と木部の部分修理を行っている。

事業の概要

令和 2 年度から 3 年度までの 2 ヶ年度の計画で本殿の屋根葺替・部分修理を実施する。本年度は仮設工事と木・建具工事を行い、主に内外陣境の木部修理と床下根太の添木補強、格子戸の補修を施工し、仮説、屋根工事に備え、山の麓から本殿へと続く石階段脇の既存資材搬入経路を利用してモノラックの架設を開始した。

令和 3 年度は檜皮屋根の葺替えを本格的に実施する予定である。　（大給　友樹）

本殿の仮設組立状況

重要文化財　那智山青岸渡寺本堂の耐震診断

建 築 年 代：天正 18 年（1590）
所　在　地：東牟婁郡那智勝浦町那智山
事業の種類：耐震診断
事 業 期 間：2020.02 ～ 2021.03

建物および事業の概要

那智山青岸渡寺は、西国三十三ヶ所巡礼の第一番札所で、熊野那智大社の社殿と隣接して建つ。如意輪観世音菩薩を本尊とする本堂は、正面 9 間、側面 9 間、入母屋屋根、こけら葺の大規模な建物である。天正 9 年（1581）の兵火後に豊臣秀吉により再建され、享保 18 ～ 19 年（1733 ～ 1734）と大正 14 年（1925）に大掛かりな修理を受け、平成 30 年に屋根葺替修理が行われている。

当地は、平成 16 年の世界遺産登録の構成要素でもあるように、歴史と由緒にあふれた霊場である。そのため、観光対策の一環で参拝者・巡礼者の安全確保も喫緊の課題として上り、今回の事業実施の運びとなった。

耐震診断の内容

現地では建物の構造的な調査、本堂が建つ地盤の特性に関する調査を、コロナ禍で緊急事態宣言期間を避けながら実施した。調査で得たデータを基に診断し、極稀の巨大地震時にも本堂は倒壊の危険性は少ない（現行基準で補強不要）という結果が得られた。大風に対しても、前方の杉木立や県指定のタブノキ、隣接する社殿群によって守られ、倒壊には至らない。歴史と伝統工法の良さが最大限に評価された格好で、今後も霊場として変わらず受け継がれるであろう。

（下津健太朗）

本堂を南東から見る（右奥には那智の滝を臨む）

国指定史跡　和歌山藩主徳川家墓所（長保寺）通用門の保存修理

建 築 年 代：江戸時代
所　在　地：海南市下津町上
事業の種類：半解体修理
事 業 期 間：2020.08 ～ 2021.03

国宝に指定された大門、本堂、多宝塔を擁する長保寺は、紀州徳川家の墓所としても史跡に指定されている。今回修理事業を行った通用門は、墓所の正門である廟門の西側に位置し、県指定文化財である霊屋や客殿への入口に設けられた唐破風付きの薬医門である。

平成 29 年の台風 21 号の影響で本瓦葺屋根の一部が破損していたが、経年による建物全体の傾斜や軒廻り木部の腐朽も進行していたため、本年度に国庫補助事業として半解体修理を実施した。

修理に伴う分解を進めた結果、良質の欅材を使用した木部において、外観から目視で破損が確認されていた部分以外は比較的健全であったが、東側基礎の垂下や、掘っ立て柱である控え柱地中部の腐朽対応のため、冠木より上部を一旦大ばらしして仮設足場に仮置きした上で、軸部の分解及び補修、基礎工事を行った。

史跡指定地であることから、基礎部分の施工に関しては細心の注意を払うことが求められたが、基礎の垂下は限定的な範囲に限られていたため、部分的な施工で済ませることが出来た。あわせて垂下の要因と推定した雨水対策として、雨落ち部分に透水管などで排水経路を確保し、すべての工事を完了した。

（多井　忠嗣）

軒廻りの大ばらし状況

国指定名勝　観海閣復元整備の基本設計

建 築 年 代：新築
所　在　地：和歌山市和歌浦中
事業の種類：基本設計
事 業 期 間：2020.08 ～ 2021.09

和歌山市南部に位置する和歌の浦は、万葉集にも詠われた景勝地として知られ、平成 22 年には国の名勝に指定されている。和歌浦湾を介して紀三井寺を望む小島・妹背山には、紀州藩初代藩主徳川頼宣により石橋（三断橋）が架けられ、山の中腹には母御万の方を弔うために建立された多宝塔（県指定）が今に伝わる。

頼宣はあわせて島東端に海にせり出す望楼・観海閣を整備し、広く市民に開放したと伝えられ、紀伊国名所図会にもその様子が描かれている。

その後幕末期には台風により被災し、和歌山城下の市民の浄財により慶応年間に再建されたが、昭和 36 年の第二室戸台風により再び倒壊し、県によって現在のコンクリート造建物として整備された。

現状建物も再建から 60 年近くが経過し、劣化が目立ってきたため、名勝の地にふさわしい建物として整備する計画となり、古写真などの根拠をもって復元することが可能で、観光地としての景観が整った大正期に在した慶応再建建物を復元整備する方針となった。

本年度は、古材や史料の調査を行い、その成果に基づいて復元建物の基本図を作成し、耐震診断業務の発注等を進めた。

（多井　忠嗣）

大正・昭和初期ころの観海閣（和歌浦在住宮本氏所蔵）

「那智の田楽」田楽舞台新調工事（重要無形民俗文化財伝統・活用等事業）

建 築 年 代：昭和 53 年（1978）
所　在　地：東牟婁郡那智勝浦町那智山
事業の種類：奉納装置の改修
事 業 期 間：2019.04 ～ 2021.03

建物の沿革と事業の概要

「那智の田楽」は、毎年 7 月 13・14 日に行われる熊野那智大社の例祭「扇祭り」の中で奉納される。その田楽が舞われる舞台は仮設（組立式）で、現在の舞台は昭和 53 年の新調になる。柱は 6 メートル四方の隅のみに建つ（西側の下屋は中古の増設）。柱を内転びとし、梁・桁の隅部に火打ち梁を入れ、その梁上の束に隅木を掛けて、入母屋屋根を受ける。年ごとに組立と解体が繰り返されるため、仕口や金物での接合箇所などで木部の劣化・破損が進み、屋根面では雨漏りも来していた。

事業は、令和元年度からの 2 カ年継続事業として実施された。まず、那智田楽保存会と和歌山県文化財保護審議委員、文化庁・県・町の担当者から成る整備検討委員会が設置され、そこで実施設計内容の確認や、工事に関する助言指導を行った。当事業においてセンターは、実施設計と工事監理を担当した。

設計時には予算の軽減を図って、屋根を入母屋式から切妻式に変更した。床板や屋根板などの長尺材は極力再用し、板へ補加した根太や垂木からの金物引付式に改めた。工事も 2 ヵ年にわたって実施し、資材調達と新材加工、板材や高欄など古材繕いと進めて、現地で基礎石の据付け、舞台の組上げ、委員会での確認後に解体・格納までを行い、竣工した。　（下津　健太朗）

改修後の舞台の正・側面を見る

大福院付属棟の修復工事
～田辺市「景観まちづくり刷新事業」～

建 築 年 代：江戸後期、明治期移築
所　在　地：田辺市湊
事業の種類：屋根葺替・部分修理
事 業 期 間：2020.01 ～ 2021.05

事業、業務の概要

大福院は、中世から近世にかけて鬪雞神社の本願職として、境内管理の一翼を担って来た。神社参道の北側に寺域を構え、現在敷地には西（写真左）から本堂、地蔵堂、山門、行者堂、鎮守堂が並び建つ。

田辺市では平成 29 年度から、国土交通省の補助事業「鬪雞神社景観保全地区内整備事業」を行って来た。その中で、大福院本堂の修復工事に続く周辺修景工事として、付属棟（本堂を除く上記の 4 棟）の修復工事と本堂周辺の整備が令和 2 年 1 月から 5 月にかけて実施された。上記の事業においてセンターは修理設計と工事監理を行った。

工事は、行者堂・山門で瓦屋根の葺替えと木部補修（行者堂背面にあった増築部は撤去）、鎮守堂と地蔵堂はトタン張りに改めてあった屋根を植物性屋根葺きの形状に整えながら銅板で葺き直し、建物間は板塀・植栽などで整備した。

建物について

鬪雞神社所蔵の文書と照合すると、行者堂は 18 世紀後半再建の「役行者堂」に該当し、明治期に境内から現在地へ移されたことが判った。本願大福院は、明治初期の神仏分離で鬪雞神社と分かれる際に、従来管理していた役行者堂や大黒天（神）などの管理を引き継いだらしく、地蔵堂は文書にある「大黒天神」に相当する様である（現在も大黒天が祀られている）。

（下津　健太朗）

整備事業後の大福院を南から見る（右手前が鎮守堂）

指定文化財図面作成業務

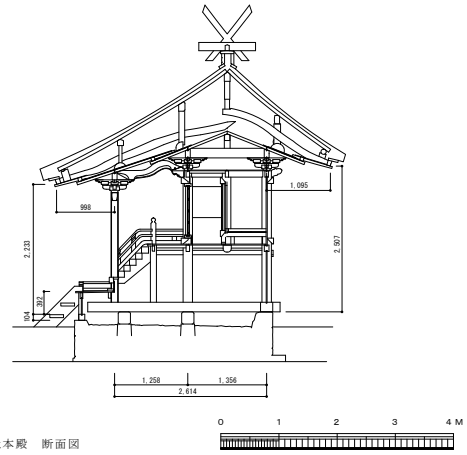
所　在　地：和歌山県内
事業の種類：図面作成
事 業 期 間：2020.09 ～ 2021.03

事業の概要

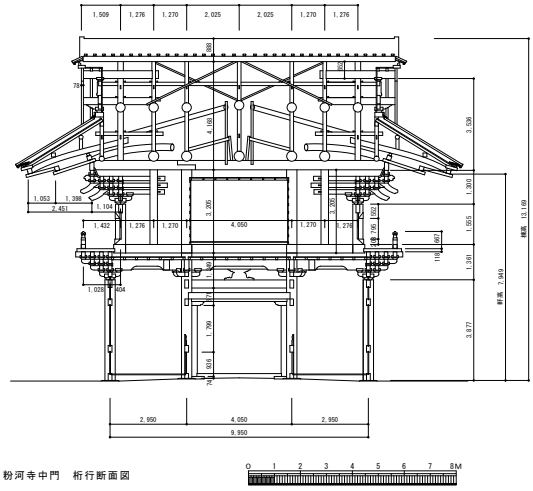
基本図面が不整備である国指定重要文化財、県指定文化財の建造物について、県が作成する文化財総合データベースに登載する為の図面を現地調査で実測したうえで、製図する業務を行った。

主な図面作成現場として、重要文化財の粉河寺本堂・中門や県指定の力侍神社といった江戸時代の建物から、濱口家住宅の各建物など、明治時代のものまで幅広く行った。

（大給　友樹）



県指定文化財 力侍神社本殿　断面図



重要文化財 粉河寺中門　桁行断面図

美浜町吉原遺跡の土器埋納遺構

はじめに

本書６ページに掲載した、令和２年度に実施した美浜町吉原遺跡発掘調査において検出した古墳時代中期の 233 土器埋納遺構について紹介したい。

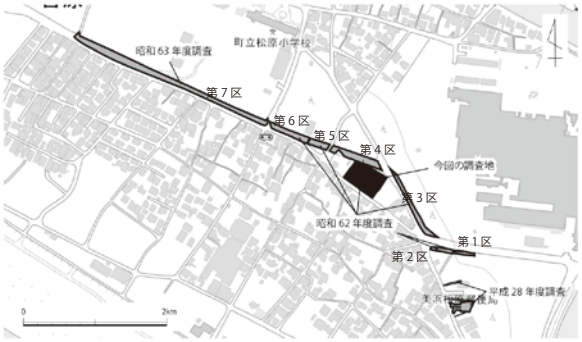
既往の調査

吉原遺跡は、紀伊半島西部の太平洋をのぞむ海岸沿いに所在する。今回の調査地点から 400 mほど南下すると、煙樹ヶ浜海岸の砂浜に出る。吉原遺跡は縄文海進以降にできた標高８～９m の砂堆上に位置する。

令和２年度の調査地の北接地で、昭和 62・63 年度に県道に伴う第１・２次発掘調査が実施され、弥生時代中期前葉から中葉、弥生時代終末期から古墳時代初頭（庄内式併行期）、古墳時代、平安時代の墓域が確認されている。しかし、弥生時代中期の土壙墓や弥生時代終末期から古墳時代初頭（庄内式併行期）の方形周溝墓等の弥生時代を中心とした遺構の密度が高く、広範囲に広がる。古墳時代の墓域は単発的で、同時期の遺構の密度が薄かった。古墳時代と思われる土壙墓は２基確認されたのみであった。

４区 SK-038 土壙墓は、長径 216㎝、深さ 43㎝をはかり、北壁際に刃部を西に向けた状態で鉄刀（直刀）が出土した。６区 SK-066 土壙墓は、長径 158㎝以上、深さ 21㎝をはかり、中央部のやや西壁側に鉇と鉄片が出土した。これらは出土遺物も少なく、詳しい時期も不明だが、出土した鉄刀や鉇から古墳時代と考える。

その他、７区で古墳時代後期（６世紀半ばから後半）の須恵器提瓶が出土しており、出土地周辺に土壙墓あるいは祭祀遺構のあった可能性がある。



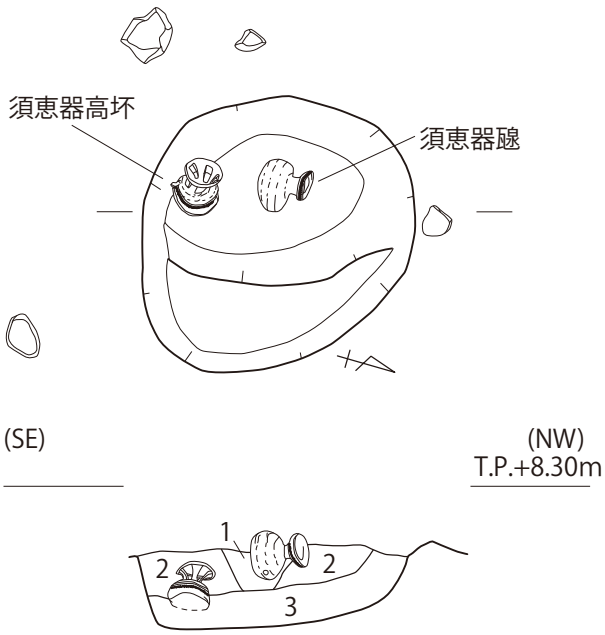
吉原遺跡　既往の調査位置図

今回の調査

令和２年度の新浜集会場新築工事に伴う発掘調査でも、標高 8.0 ～ 8.3 mの、にぶい黄褐色細砂層上面で、昔の人々の生活痕跡である遺構や出土遺物を確認した。

233 土器埋納遺構は、集会場建物部分である２区の南西部で確認した。規模が、長径 203㎝、短径 176㎝、深さ 31㎝の、平面形は東側にやや尖った楕円形の遺構である。埋土は、粘質シルトの混じったにぶい黄褐色細砂～粗砂であり、遺構面の構成土に類似していたが、やや黒ずんでいた。遺構の中央部の検出面直上で、古墳時代中期（５世紀半ば）の須恵器𤮈（1）が口縁部を北に向けて横倒しの状態で出土した。遺構の南側中層で古墳時代中期（５世紀半ばから後半）の須恵器無蓋高坏（2）が口縁部を下に向けた状態で出土した。坏部に１カ所把手の痕跡はあるが、把手自体は破損して残存しない。

今回の調査地は、防風林の一画を伐採してから発掘調査を行なったため、残された切株の除去時に立会調査を実施した。その際、調査地西部の株元で古墳時代



1　10YR5/4にぶい黄褐色粘質シルト混細砂～粗砂
2　10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト混細砂～粗砂
　　礫φ2～5㎝
3　10YR4/3にぶい黄褐色粘質シルト混細砂～粗砂

0　1:40　2m

233 土器埋納遺構 平面図・土層断面図

中期（５世紀後半）の須恵器壷（3）が出土した。口縁部から頸部を打ち欠いた以外は完形で出土した。口縁部を打ち欠いたことで、日常的に使用したものではなく、墓に副葬されたものか、祭祀に使用されて、その後、埋納されたものと思われる。

その他、２区遺構面上で、古墳時代の須恵器坏や杯蓋の口縁部片、土師器片が出土しているが、細片が多くまとまって出土したものもなかった。

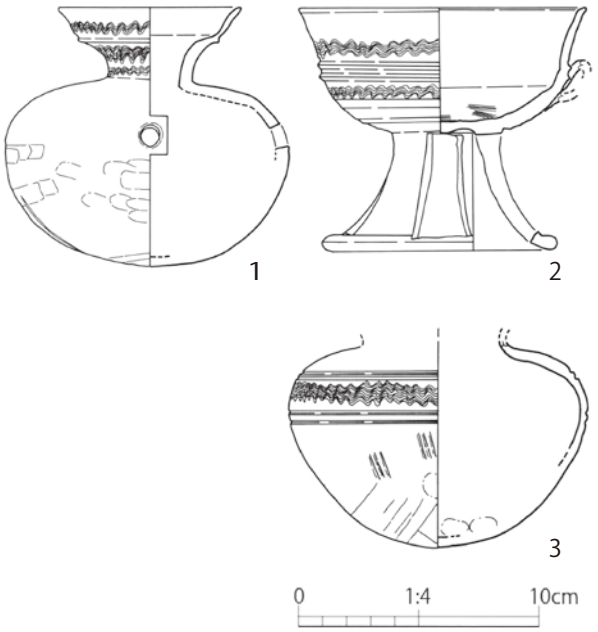
まとめ

今回の調査では、古墳時代の遺構は昭和 62・63 年度の調査に引き続き、あまり密度は高くなく、広範囲に広がらず、単発的に南に広がることが確認された。

233 土器埋納遺構は、中層出土の須恵器無蓋高坏の生産時期が新しく、上層出土の須恵器瓹が古いという逆転的な状況が確認された。これらの須恵器は、墓に副葬されたものか、祭祀に使用され埋納されたものか不明であるが、最大で 50 年ほどの時期差があるにもかかわらず、須恵器瓹と高坏を同一の遺構内に納めるということに重要な意図があったと思われる。

和歌山市西庄遺跡や由良町里Ⅱ遺跡など、紀伊半島海岸部の砂丘や砂堆上に位置する遺跡で確認される、壷や高坏、甕等を埋納した遺構も同様の遺構の可能性がある。（田之上裕子）

※本稿を執筆するにあたって、西庄遺跡と里Ⅱ遺跡の土器出土遺構に関して、冨加見泰彦氏のご教授を得た。記して感謝を表します。



令和３年度吉原遺跡発掘調査　出土遺物実測図

須恵器埋納遺構内　須恵器出土状況（東から）

須恵器埋納遺構内　土層断面（西から）

須恵器瓹（１）

須恵器無蓋高坏（２）

護国院三社権現基壇の発掘調査

はじめに

三社権現は和歌山市紀三井寺地内に所在する護国院の境内に建つ鎮守社であり、南から金剛蔵王権現社、熊野三所権現社、白山妙理権現社の社殿３棟から成る。現在の建物は江戸の建立で、昭和 27 年の改変で、礎石を補強するようにコンクリートの基礎が設置されている（写真１）。

当文化財センターは、令和元年度に三社権現の解体修理を実施した。これを機に、基壇の変遷や前身建物に関する情報を得るため、発掘調査を行った。なお、基壇は建物の修復後も使用するため、調査の範囲を最小限にする必要があることから、社殿の中心を通るＬ字形のトレンチを２本ずつ設定し、発掘調査を行った（図１）。

写真１　調査前の三社権現（北西から）

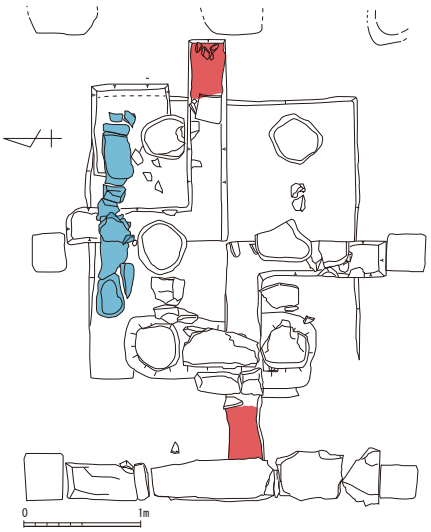


図１　白山妙理権現平面図（上が東）

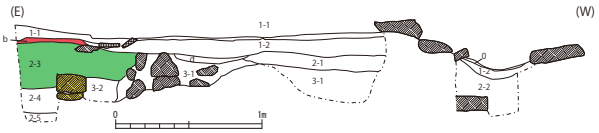


図２　白山妙理権現東西方向断面図

調査の成果

それぞれの社殿から、現存する礎石の外側を囲むように赤土の層が確認された（図１・図２の赤色部、写真２）。これらの層は社殿の縁にあたる箇所で見られたこと、土色が赤みを帯びていることから、社殿の塗り替えに伴い掻き落とされた古い塗料が表面に付着したものとみられる。赤土の層は２層確認されたことや周辺の出土銭貨から、社殿の塗り替えが２回、うち１回は近現代に行われたことが分かる。また、現存する礎石の中心から 0.4 m外側に、自然石を用いた石列を検出した（図１の青色部）。石列は東西方向に延び、現在の屋根のほぼ真下で検出したことから、雨落ち溝あるいは基壇上面の化粧石の可能性がある。

現状基壇の東端から約 20㎝内側で、表土より深さ約 23㎝の地点から南北方向に並ぶ結晶片岩の石積（図２の黄色部、写真３）を検出した。片岩の石積の上には現状基壇を構成する土（図２の緑色部）が乗っていたことから、片岩の石積は現状基壇が造成される前に存在した前身基壇の端部である可能性がある。西端は現状基壇の裏込めにより多くが欠失しており、深さは異なるものの東端と同様の結晶片岩を検出した。これらを前身基壇の両端とした場合、基壇の規模は現状（東西幅約 3.6 m）より小さい東西幅約 2.9 mで、基壇の端が現状建物の軒先位置と合致する。

遺物は主に銭貨、瓦、貝殻などが出土した。現状の礎石より上の層（図２の１層）からは現代の１円・10 円硬貨、近代銭、寛永通寶（新寛永）が出土した。

写真２　赤土検出状況（西から）

写真３　基壇端とみられる石積（北から）

現状の礎石直下の層では寛永通寶（新寛永・古寛永）のみが出土した。現状の礎石は江戸時代に設置されていることが分かった。銭貨は遺構からまとまって出土したものではないことから、賽銭であったと考えられる。

なお、現在の礎石の掘方や、前身建物の礎石およびその抜き取り痕などは確認されなかった。

基壇の変遷

今回の調査により、三社権現の基壇は現在に至るまで少なくとも３回の改変が施されたと判明した。基壇が現在に至るまでの過程は以下のようになるとみられる。

第１期：前身基壇であり、今回の調査で確認できる最古のものである。基壇の規模は現状より小さいものの、建物の位置は現状と大きく変わらないと考えられる。

第 2-1 期：江戸時代前期に行った現状社殿の建設に伴う大規模改変による姿である。基壇のかさ上げ及び現在とほぼ同じ規模への拡張を行った。この時期に設置した礎石が以降現在まで用いられる。また、社殿の外側で東西方向に並ぶ石列はこの時期に設置したとみられる。

第 2-2 期：社殿の改変が行われ、この改変に伴い社殿の塗り替えが行われる。基壇表面に赤色塗料が付着したため、きめ細かい黄色系の土を薄く重ねたと考えられる。

第３期：江戸時代から昭和 27 年までに行った改変による基壇である。基壇の盛土・整地を行った（1 層の形成）一方、建物の礎石に変更は加えられていない。

第４期：昭和 27 年の改変による、現状の基壇である。白山妙理権現の改修に合わせ、各社殿にコンクリート基礎を設置した。他の２社については、建物が建ったまま外側にコンクリートが設置されている。この改変に際し、社殿の塗り替えが行われた。（森田　真由香）

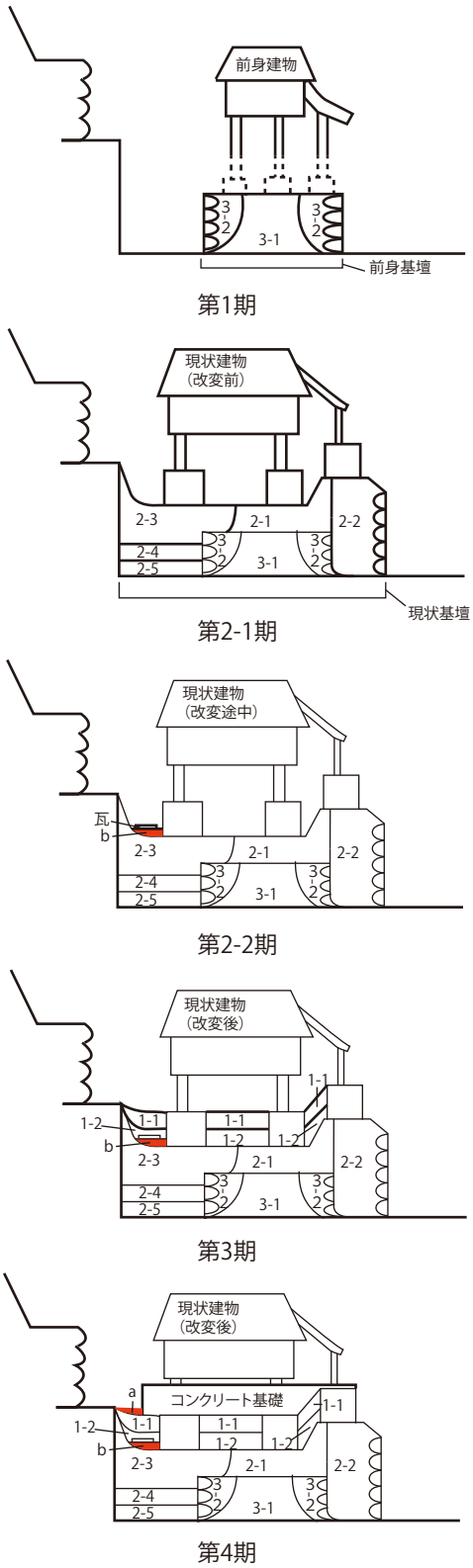


図３　基壇の変遷

和歌山城跡出土の貝杓子と鹿角

はじめに

周知の遺跡である和歌山城跡は、内堀と外堀に囲まれた三の丸を中心とする遺跡である。江戸時代には、紀州徳川家の家老をはじめ、比較的上級の家臣の屋敷地であった。

和歌山城跡の発掘調査は、これまで和歌山市関係で 39 次、当文化財センターで 7 次を数える。2017・2018 年度に当文化財センターが実施した 7 次調査は、和歌山県立医科大学薬学部新築に伴うもので、面積約 4,200㎡を調査した。遺跡の下位では弥生時代中期以降、耕作地や集落として土地活用され、江戸時代においては生活面を嵩上げして屋敷地が維持されていたことが明らかになっている。屋敷地では建物遺構や土塀基礎、井戸などのほかに多くの廃棄土坑が検出され、とりわけ、塵芥を処理した廃棄土坑からは、生活に密着した多種多様の遺物が出土しており、これらから当時の武士の生活を窺うことができる。廃棄土坑から出土する遺物には、土器類や瓦以外に、木製品や動物遺存体が多く出土している。ここでは、動物遺存体のなかで、人為的に手が加えられたイタヤガイ製の貝杓子と鹿角について紹介する。

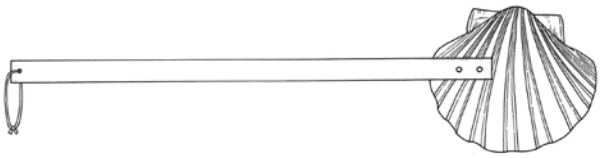
動物遺存体の概要

和歌山城跡の整理業務では、東海大学の丸山真史氏によって動物遺存体の分析が行われ、内容が明らかにされている。報文によれば、これらには貝類（巻貝（ダンベイキサゴ、サザエ、アワビ類、スガイ、コシダカガンガラ、ツメタガイ、テングニシ、バイ、アカニシ）・二枚貝（ヤマトシジミ、シオフキ、ハマグリ属、イタヤガイ、アカガイを含むフネガイ科、マガキ、ベンケイガイを含むタマキガイ科、オキシジミ、バイガイ、コマタガイ、ワスレガイ）、魚類（マダイ、キダイ、チダイ、クロダイ属、タチウオ、ハモ属、カサゴ属、コチ科、ホウボウ科、ボラ科、マダラ、アンコウ科、ブリ属、アジ科、カツオ、マグロ属、ヒラメ、フグ科）、爬虫類（スッポン、イシガメ）、鳥類（キジ、ヤマドリ、ニワトリ、ガン族、カモ族、スズメ目）、哺乳類（シカ、イノシシ、ブタ、カモシカ、イヌ、タヌキ、ネコ、ネズミ科）があり、とりわけ貝類・魚類を中心とする海産物が多くを占め、屋敷地内での食生活を垣間見ることができる。また、海産物のほとんどが和歌山湾沿岸で漁獲できるものであるが、寒海性のマダラも出土していることから、当時の流通網を窺うことができる。

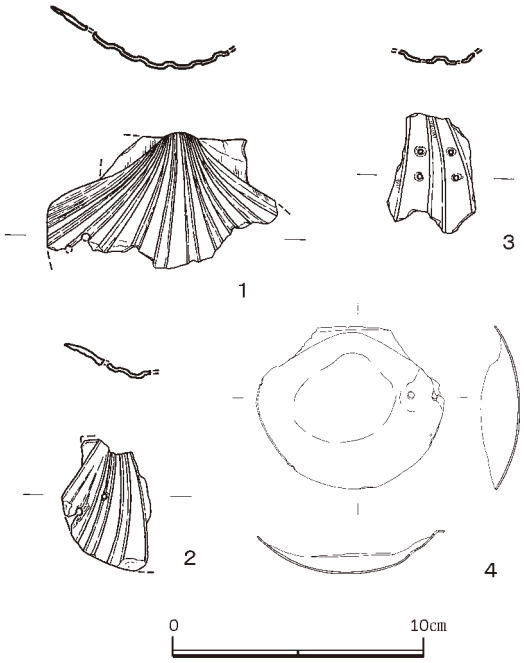
動物遺存体の出土状況

貝杓子

貝杓子はイタヤガイやホタテガイなどの大型の二枚



貝杓子模式図



貝杓子（1～3）と貝杓子形銅製品（4）

貝の側縁に柄を装着したものである。ホタテガイの生息域が東北以北であるのに比べ、イタヤガイの生息域が北海道以南であることから、貝杓子はイタヤガイ製が多い。イタヤガイ製の貝杓子は弥生時代の遺跡から出土しており、また、昭和の前半代まで同じ形態で使用されていたことも分かっている。なお、イタヤガイは貝殻の文様が板葺き屋根に似ていることから漢字では「板屋貝」と書き、食用にも適している。

和歌山城跡から出土したイタヤガイ製の貝杓子は、３点出土している。１・２は 19 世紀以降の土坑（2-147）、３は 17 世紀初頭頃土坑（2-169）から出土している。すべて完形品ではないものの、柄を装着するための孔が穿たれていることから貝杓子と判断した。孔は直径３㎜程度で、１・２はが２か所、３は４か所穿たれている。

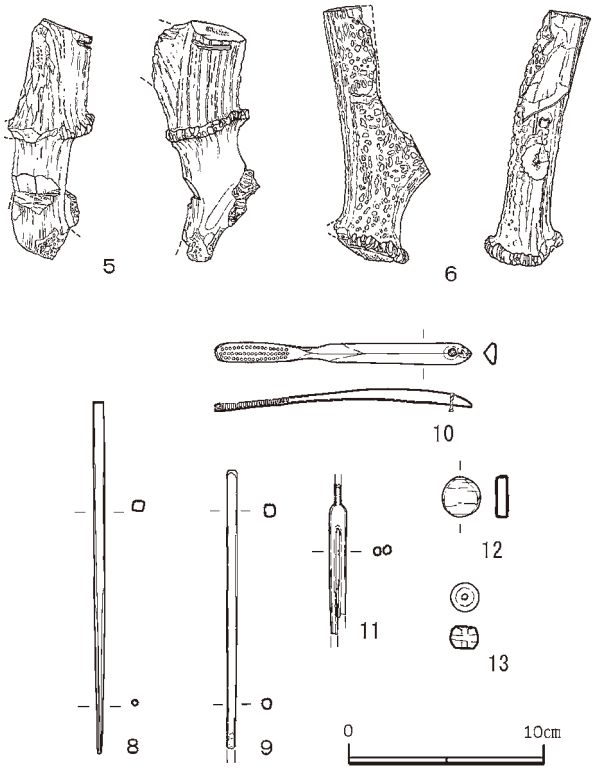
貝杓子

鹿角

鹿角は３本出土しており、それぞれに加工痕が認められ、骨角製品の素材であると考えられる。すべて 18 世紀後半代の土坑（1-011）から出土している。５・７は頭蓋骨が一部残る右角で、頭蓋骨部にナタ状工具による加工痕がみられる。また、５の角幹には角座から約５㎝付近でノコギリを使用した切断痕があり、その角座側にも平行してノコギリの痕跡が認められ、角枝は欠損している。６は頭蓋骨がなく、自然落角した左角である。角幹は角座から約 13㎝で、角枝は基部付近でノコギリによって切断されている。

まとめとして

杓子は貝殻の意匠が一般に好まれたようで、貝杓子を模した金属製杓子のほか木製杓子などもあり、実際和歌山城跡の発掘調査でも貝杓子を模した銅製杓子（４）が、17 世紀～ 18 世紀の井戸（4-102）から出土しており、孔も同様な位置に穿たれている。



加工痕のある鹿角と骨角製品

加工痕のある鹿角

イタヤガイは４点確認されているが、そのうち３点に穿孔が認められ、他の１点についても破片であることから穿孔の有無は明らかでない。製品率が高いことからも屋敷地内で製品化していたと考えるよりは、貝杓子として商品化したものを買ったもので、イタヤガイを食用としていなかった可能性もある。

調査で出土した骨角製品には箸（８・９）、櫛払い（10）、簪（11）、双六のコマ（12）、有孔玉（13）などがある。すべて鹿角製品であるか明らかでないが、紹介した鹿角は加工途中の素材であることからも、製品を作っていた可能性があり、屋敷地内での生産活動を窺う資料と言える。　（川崎　雅史）

令和２年度（2020）の普及啓発活動

〇埋蔵文化財に関する普及事業

・シンポジウム・報告会

和歌山県内文化財調査報告会「地宝のひびき」

公開シンポジウム「方形周溝墓から古墳へ～和歌山県の発掘事例から考える」

・歴史探訪

「歩いて知るきのくに歴史探訪～田辺城跡周辺の文化財を訪ねて～」

・埋蔵文化財調査成果展

「紀州のあゆみ」

・埋蔵文化財発掘調査概要パンフレットの作成

・発掘調査説明会・現地公開

「吉原遺跡発掘調査」

「立野遺跡発掘調査」

「且来Ⅵ遺跡発掘調査」

〇文化財建造物に関する普及事業

・修理現場見学会

「重要文化財　丹生官省符神社」

埋蔵文化財に関する普及事業

令和２年度の普及啓発事業として埋蔵文化財関係では８件の事業を実施した。このうち、文化財調査報告会、公開シンポジウム、歴史探訪、埋蔵文化財調査報告会は国庫補助金を受けて実施した。このほか、各発掘調査現場において現地説明会・公開を実施した。

また、季刊情報誌『風車』の刊行の他、各事業において資料集やマップ等を作成し、参加者及び周辺自治体、研究機関等に配布し、好評を得た。

コロナ禍の中での実施となり、感染症対策として参加型の事業にはついては、体温チェックを実施し、三密を避けて参加人数の制限なども行った。

和歌山県内文化財調査報告会「地宝のひびき」

令和２年 11 月１日にイオンモール和歌山３階イオンホールにおいて、前年度の埋蔵文化財調査の成果などを周知するため、和歌山県内文化財調査報告会「地宝のひびき」と題して開催した。参加者数は、42 名（事前申込）である。

発表は、「熊野古道沿いの暮らしと信仰―熊野古道みどころ整備事業の報告―」山本光俊（当文化財センター）、「中世集落跡―青木Ⅰ遺跡の発掘調査―」中原七菜子氏（湯浅町教育委員会）、「山本氏の本拠、龍松山城跡の発掘調査」田中元浩氏（和歌山県教育委員会）・小倉英樹（上富田町教育委員会）、「紀南地域の山城跡を掘る―結城城跡・里野中山城跡の発掘調査―」田之上裕子（当文化財センター）、「紀州藩三の丸評定所の発掘調査―和歌山城跡第 39 次調査―」井馬好英氏（（公財）和歌山市文化スポーツ振興財団）・森田真由香（当文化財センター）の５本である。

また、誌上報告として７本の報告を加えた報告資料集を刊行して参加者に配布した。

地宝のひびき　チラシ（表）

地宝のひびき　開催風景

公開シンポジウム「方形周溝墓から古墳へ～和歌山県内の発掘事例から考える～」

令和３年２月 20 日、公開シンポジウム「方形周溝墓から古墳へ～和歌山県内の発掘事例から考える～」をイオンモール和歌山３階イオンホールにおいて開催した。参加者数は、50 名（事前申込）である。

報告は、「橋本市柏原遺跡の方形周溝墓群」丹野拓（当文化財センター）、「和歌山市菖蒲谷遺跡の再検討―尾根と谷に築かれた台状墓―」河内一浩氏（元（財）和歌山県文化財センター）、「和歌山市井辺遺跡の墳丘墓」菊井佳弥氏（（公財）和歌山市文化スポーツ振興財団）、「和歌山市秋月１号墳の発掘調査」黒石哲夫氏（和歌山県教育委員会）の４本である。報告後には、各発表者による討論を行い、和歌山県における古墳成立期の墳丘墓を中心に弥生時代から古墳時代の墓制について意見を交わした。

また、誌上発表として３本の発表を加えた発表資料集を刊行して参加者に配布した。

シンポジウム　討論風景

シンポジウム　発表資料集（表紙）

歴史探訪「歩いて知るきのくに歴史探訪　～田辺城跡周辺の文化財を訪ねる～」

令和２年 11 月 14 日、「歩いて知るきのくに歴史探訪～田辺城跡周辺の文化財を訪ねる～」を開催した。

当日は 21 名（事前申込）が参加し、JR 紀伊田辺駅を出発して、マップを手に参加者とともに、田辺城下町遺跡で発掘調査が行われた海蔵寺通りや田辺城水門跡、国指定史跡である高山寺貝塚、熊野古道に関連する道分け石や、世界遺産を構成する闘雞神社を巡った。

田辺城下町遺跡、高山寺貝塚及び道分け石については当文化財センター職員が解説し、田辺城跡及び水門跡については近畿大学講師新谷和之氏に、闘雞神社については長澤好晃宮司にそれぞれ解説いただいた。また、田辺城跡の範囲では、町中に残された石垣の一部も見学することができた。

歴史探訪　当日配布の文化財マップ

歴史探訪　新谷氏による田辺城跡の解説

和歌山県内埋蔵文化財調査成果展「紀州のあゆみ」

近年に県内で実施された埋蔵文化財関係の調査成果を県民などに公開することを目的に、和歌山県立紀伊風土記の丘資料館、有田市郷土資料館で巡回展示を行った。

展示を行った遺跡は、和歌山城跡、田屋遺跡、和田岩坪遺跡（以上、和歌山市）、且来Ｖ遺跡（海南市）、青木Ｉ遺跡（湯浅町）、道の川集落跡（田辺市）、里野中山城跡（すさみ町）、「結城城跡」（串本町）、「新宮城下町遺跡」（新宮市）で、パネル展示として「根来寺遺跡」（岩出市）における階段状遺構の型取り作業状況や「天路山城跡」（日高町）の発掘調査について写真も併せて展示した。

展示期間は、和歌山県立紀伊風土記の丘資料館では令和２年５月30日～６月28日、有田市立郷土資料館では令和２年10月３日～11月８日であった。また、来館者はそれぞれ257名、591名であった。

なお、和歌山県立紀伊風土記の丘資料館での展示期間中の６月21日に、紀伊風土記の丘主催の展示講座において当文化財センター職員が田屋遺跡、結城城跡、里野中山城跡についての調査成果や出土遺物について紹介し、展示解説を行った。

紀州のあゆみ　職員による展示解説風景

紀州のあゆみ　展示解説リーフレット（表紙）

埋蔵文化財発掘調査概要パンフレットの作成

（財）和歌山県文化財センター、又は（公財）和歌山県文化財センターが発掘調査した遺跡のなかで、大部分、または主要部分について発掘調査を行った遺跡、発掘調査によって大きな成果が得られている遺跡を選び、概要パンフレットを一般向けに作製した。

本年度作成したのは、室町幕府の紀伊国守護であった畠山氏の勢力によって築かれたと見られる高田土居城（みなべ町）跡である。この城は、発掘調査によって内郭と外郭からなり、堀や土塁を厳重に巡らせた大規模な城で、廃城後は鋳造工房として利用されていたことも明らかとなっていた。

パンフレットはＡ４版縦型で、Ａ３用紙を２つ折りで製本した。

発掘調査概要パンフレット（一部）

現地説明会・現地公開

遺跡の発掘調査を広く一般の方々に周知するため、発掘調査の現地公開を開催した。

各現場の発掘調査担当者による遺跡の解説を行い、地元の方を中心に参加者を得ることができた。現地公開を開催した遺跡と開催日及び参加者は、以下の通りである。

【現地説明会】

・吉原遺跡　　令和２年９月12日　参加者53名

【現地公開】

・立野遺跡　　令和２年10月23日　参加者20名

・且来Ⅵ遺跡　　令和３年２月24日　参加者20名

【その他】

・吉原遺跡　令和２年９月２日　美浜町立松原小学校
　　６年生 25 名

吉原遺跡現地説明会

立野遺跡現地公開

且来Ⅵ遺跡現地公開

且来Ⅵ遺跡現地公開資料

文化財建造物に関する普及事業

文化財建造物の保存修理現場では、所有者・地元の教育委員会が開催する現場見学会等に協力し、建物や工事の内容について解説を行った。

また、現場では施工状況の説明を通して、文化財保全について関係者や近隣住民の理解が深まるように努めた。

参加者には修理概要を伝えるリーフレットを作成と配布し、工事期間においては仮設正面や社務所等に実施状況を説明する資料を掲示した。

現場見学会の様子（丹生官省符神社）

社務所の掲示板（丹生官省符神社）

観光経路に面した仮設正面の掲示の様子（金剛峯寺奥院経蔵）

（公財）和歌山県文化財センター　令和２年度（2020）　概要

Ⅰ　受託業務

埋蔵文化財発掘調査等受託業務	３件
埋蔵文化財出土遺物等整理受託業務	３件
埋蔵文化財確認調査支援等受託業務	13 件
文化財建造物保存修理技術指導業務等	20 件

Ⅱ　理事会・調査委員会・会議など

理事会・評議員会

理事会	02.06.05 提案	書面会議
評議員会	02.06.15 提案	書面会議
理事会	02.11.27	中間報告（書面）
理事会	03.03.19	和歌山県自治会館

調査指導

新宮城下町遺跡発掘調査出土遺物についての調査指導　02.12.11 ～ 13　藤沢良祐（愛知学院大学文学部教授）
（新宮城下町遺跡出土遺物等整理支援業務（２））　於：熊野速玉大社・和歌山県立博物館・（公財）和歌山県文化財センター整理棟

埋蔵文化財課関係

近畿ブロック主担者会議等

令和２年度第１回（第 61 回）全国埋蔵文化財法人連絡協議会　近畿ブロック主担者会議	02.06.12	（中止）
令和２年度第２回（第 62 回）全国埋蔵文化財法人連絡協議会　近畿ブロック主担者会議	03.02	書面会議
令和２年度（第 34 回）全国埋蔵文化財法人連絡協議会　近畿ブロック事務担当者会議	03.01	書面会議
令和２年度全国埋蔵文化財法人連絡協議会　近畿ブロック会議	03.03	オンライン会議

委員委嘱

村田　弘	紀の川市文化財保護審議会委員	02.04.01-03.03.31	紀の川市教育委員会	02.04.01 付依頼
村田　弘	紀の川市名手本陣保存整備委員会委員	02.04.01-03.03.31	紀の川市教育委員会	02.03.28 付依頼
川崎　雅史	御坊市文化財保護審議会委員	02.04.01-03.03.31	御坊市教育委員会	02.04.01 付依頼
川崎　雅史	みなべ町文化財保護審議会委員	02.04.01-03.03.31	みなべ町教育委員会	02.04.01 付依頼
川崎　雅史	坂本付城跡、竜松山城跡調査検討委員	02.04.01-03.03.31	上富田町教育委員会	02.04.01 付依頼
結城　啓司	史跡金剛峯寺境内（奥院地区）大名墓総合調査委員会	02.04.01-02.09.31	高野町教育委員会	02.04.01 付依頼

Ⅲ　講師等派遣・執筆など

埋蔵文化財課関係

田之上裕子	「結城城跡、里野中山城跡」展示講座「紀州のあゆみ展」	02.06.21	於：和歌山県立紀伊風土記の丘資料館
森田真由香	「田屋遺跡」展示講座「紀州のあゆみ展」	02.06.21	於：和歌山県立紀伊風土記の丘資料館
田之上裕子	「吉原遺跡埋蔵文化財見学」美浜教育委員会	02.09.02	於：吉原発掘調査現地
丹野　拓	「土地に刻まれた八幡神社～発掘調査から～」広川町耐久大学	02.10.10	於：広川町中央公民館
川崎　雅史	みなべ観光セミナー第３回「高田土居城跡―戦国時代のみなべ―」みなべ観光ガイドの会	02.11.20	於：みなべ町役場
村田　弘	「新宮城下町遺跡調査委員会の開催に伴う協力について」新宮市教育委員会	02.08.21	於：和歌山県庁会議室３Ａ
村田　弘・川崎　雅史	「新宮城下町遺跡調査委員会の開催に伴う協力について」新宮市教育委員会	03.03.26	於：和歌山県立博物館

文化財建造物課関係

結城　啓司	「旧県会議会議事堂整備事業に伴う根来寺遺跡復元画について建築史の立場からの指導・検討」	02.04.24	於：根来寺遺跡展示施設
下津　健太朗	「重要文化財旧西村家住宅（西村伊作記念館）再開セレモニー」館内案内　新宮市教育委員会	02.06.26	於：旧西村家住宅

下津　健太朗　「耐久大学郷土専科　有田地方の瓦について」講師　広川町耐久大学　02.09.12　於：広川町中央公民館
多井　忠嗣・大給　友樹　「重要文化財丹生官省符神社本殿の例祭」見学解説　02.10.25　於：丹生官省符神社
下津　健太朗　「耐久大学郷土専科　廣八幡神社の建築的特徴」講師　広川町耐久大学　02.12.12　於：広川町中央公民館
多井　忠嗣・大給　友樹　「重要文化財丹生官省符神社本殿の見学会」　03.02.14 , 03.02.21 於：丹生官省符神社
下津　健太朗　「旧西村家住宅の魅力 保存修理工事を通して見えてきた伊作さんの想い」『住宅建築４月号』　03.04.01 発行

Ⅳ　刊行図書・出版物等

年報

『公益財団法人和歌山県文化財センター年報 2019』　02.05.31 発行

埋蔵文化財課関係

調査報告書

『田屋遺跡－県道紀伊停車場田井ノ瀬線道路改良事業に伴う発掘調査報告書－』（公財）和歌山県文化財センター　02.12.28 発行
『立野遺跡－町道立野中道線外道道路改良工事に伴う発掘調査報告書－』（公財）和歌山県文化財センター　03.01.15 発行
『和歌山城跡－和歌山県立医科大学薬学部新築に伴う発掘調査報告書－』（公財）和歌山県文化財センター　03.03.19 発行
『吉原遺跡－新浜集会場新築工事に伴う発掘調査報告書－』（公財）和歌山県文化財センター　03.03.25 発行
『新宮城下町遺跡－新宮市文化複合施設建設に伴う発掘調査報告書－』新宮市教育委員会（公財）和歌山県文化財センター　03.03.31 発行

現地説明会・現地公開資料

「吉原遺跡発掘調査　現地説明会資料」　02.09.12 発行
「立野遺跡発掘調査　現地公開資料」　02.10.23 発行
「且来Ⅵ遺跡発掘調査　現地公開資料」　03.02.24 発行

報告会・シンポジウム資料等

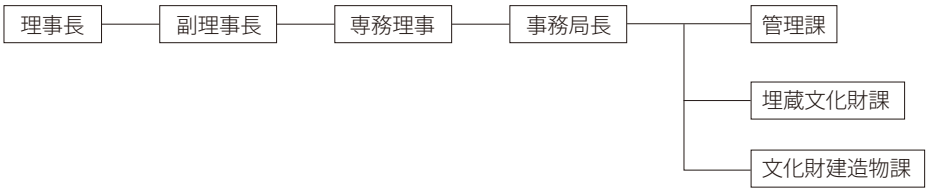
『和歌山県内埋蔵文化財調査成果展　紀州のあゆみ』展示解説リーフレット　02.05.30 発行
『地宝のひびき－和歌山県内文化財調査報告会－』資料集　02.11.01 発行
『歩いて知るきのくに歴史探訪～田辺城跡周辺の文化財を訪ねる～』当日配布マップ　02.11.14 発行
『公開シンポジウム　方形周溝墓から古墳へ～和歌山県内の発掘事例から考える～』発表資料集　03.02.20 発行
『みなべ町　高田土居城跡－守護勢力が築いた居館－』和歌山県の文化財⑤パンフレット　03.03.31 発行

『風車』紀州の歴史と文化の風　　文化財センター季刊情報誌『かざぐるま』

風車 91　2020 夏号　特集「護国院三社権現の保存修理」　02.08.31 発行
風車 92　2020 秋号　特集「結城城跡・里野中山城跡の発掘調査成果」　02.11.30 発行
風車 93　2020 冬号　特集「吉原遺跡の発掘調査成果」　02.12.31 発行
風車 94　2021 春号　特集「鬪雞神社の保存修理工事」　03.03.31 発行

Ⅴ　組織

組織図



役員（理事）

理事長	櫻井　敏雄	元近畿大学　教授
副理事長	宮﨑　　泉	和歌山県教育委員会　教育長
専務理事	宮地　良治	元紀中県税事務所長
理　　事	逸木　盛俊	宗教法人粉河寺　代表役員
理　　事	小野　健吉	和歌山大学　教授
理　　事	工楽　善通	大阪府立狭山池博物館　館長

理　事	鈴木　嘉吉	元奈良国立文化財研究所　所長
理　事	中村　浩道	和歌山県立紀伊風土記の丘　館長
理　事	中村　貞史	元大阪経済大学非常勤講師
理　事	林　　宏	元一般社団法人和歌山県文化財研究会会長

役員（監事）

監　事	風神　正典	税理士・風神会計事務所　代表社員
監　事	松本　泰幸	和歌山県教育庁　生涯学習局長

評議員

井藤　　徹	日本民家集落博物館　館長
小野　俊成	宗教法人道成寺　代表役員
加藤　容子	元和歌山県教育委員（～ 02.06.09）
栗生　好人	和歌山県教育庁　文化遺産課長
中村　拓司	和歌山県立紀伊風土記の丘　副館長
佐々木公平	宗教法人広八幡神社　代表役員
千森　督子	和歌山信愛大学　教授
日向　　進	京都工芸繊維大学名誉教授
南　　正人	和歌山県立博物館　副館長
和田　晴吾	兵庫県立考古博物館　館長

職員

事務局長	井上　挙宏（管理課長事務取扱）
事務局次長	立花　佳樹

管理課

主　　任	松尾　克人
主　　査	出口　由香子
副主査	石山　慎二

埋蔵文化財課

課　　長	丹野　　拓
副主査	山本　光俊
副主査	村田　　弘
副主査	土井　孝之
副主査	川崎　雅史
技　　師	森田　真由香
技　　師	田之上　裕子
技　　師	濵﨑　範子
専門調査員	佐伯　和也

文化財建造物課

課　　長	多井　忠嗣
主　　査	下津　健太朗
副主査	結城　啓司（～ 02.09.30）
技　　師	大給　友樹

表紙図案

表紙右上	和歌山城跡出土　絵志野向付
表紙下	護国院三社権現正面図
表紙裏	護国院三社権現平面図

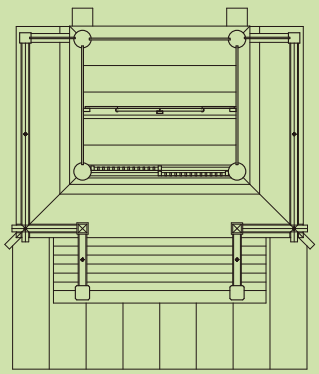
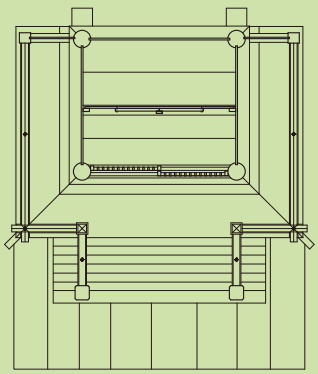
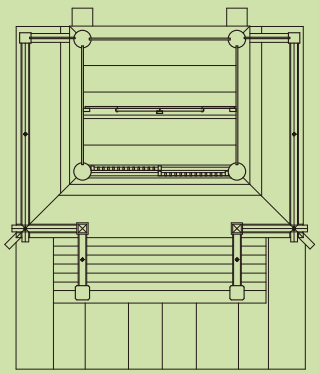
公益財団法人
和歌山県文化財センター年報
2020

2021 年 5 月 31 日

【発行】
公益財団法人 和歌山県文化財センター

〒640-8301 和歌山市岩橋 1263 番地の 1
TEL 073-472-3710
FAX 073-424-2270

http://www.wabunse.or.jp/
E-mail: kanri-2@wabunse.or.jp

【印刷】
白光印刷株式会社

（公財）和歌山県文化財センター
http://www.wabunse.or.jp